

## 「海草集」影印・解説

牧野和夫

### 解説

ここに影印に附す一本は、実践女子大学図書館山岸文庫蔵『表白集』上・下二卷（透写、抛水府明德会彰考館文庫旧蔵〔鎌倉〕写本）であり、院政期末鎌倉初の学僧海恵の草を蒐めていることから一般に「海草集」と呼称される「表白集」である。『彰考館文庫目録』（昭52・11・30刊、附焼失目録）によるならば、底本にあたる原本（辰部、詩文、六番「表白集」五冊）が今次の大戦に罹災したことが知られる（十二巻本『表白集』三冊を併せて、五冊となす）。

昭和十七年の新写本ではあるが、原本の焼失した今日において、貴重なる伝本であることは云うまでもない。

山岸徳平氏「海恵僧都と海草集」（『日本漢学研究』所収）に既に紹介のあるところであるが、当時、彰考館蔵本の他にも本鈔の善本と目すべき伝本があった（現存を確認していない。近く調査の機を得るの幸に恵まれることを期待している）。高野山親王院（当時の住職は水原堯栄師）の蔵する鎌倉期の写本二帖である。幸運にも、山岸氏令写の二本を山岸文

庫が蔵している。

山岸文庫の所蔵する『海草集』は、従って、次の三本である。

A、『表白集』 卷上・下 大二冊

昭和十七年山岸徳平氏令写（堀彰考館旧蔵〔鎌倉〕写『表白集』五冊ノ内）

B、『海草集』 存卷上・中 大一冊

昭和十四・五年頃写（堀高野山親王院蔵〔鎌倉頃〕写『海草集』二帖）

C、『海草集』 存卷上・中 大一冊

昭和十五年山岸徳平氏令透写カ（堀高野山親王院蔵〔鎌倉頃〕写二帖）

以下に、個々の簡単な書誌的事項を記し、少しく述記を施すが、詳細な検討などについては、別稿に譲る。又、親王院蔵本を底本とした透写本の影印・紹介は、次号以降に掲載する予定である。

## A 山岸文庫蔵

表白集 二卷 釈海恵撰

昭和十七年山岸徳平氏令写（堀彰考館旧蔵〔鎌倉〕写『表白集』ノ内）

大二冊

褐茶地表紙（二六・九×一九・四糎）、左肩、白楮紙を貼り「海草集<sub>上</sub>（下）」と墨書、右下方「共二」、右肩「貴」といず



れも墨書。扉紙、底本表紙題簽等を左肩单边枰（一八・七×四・〇糎）内に摸し「海惠僧都表白集上（下）（朱）」と墨・朱書。右肩

双边枰内「辰一六」（六・三×二・七糎）と打付墨書、その丁裏「上卷欠題簽今便宜附之云云」と山岸氏墨手識あり。一・ウから3・ウ迄、目錄、「静遍律師灌頂嘆徳 道寛阿闍梨灌頂嘆徳」能寛律師灌頂嘆徳 同灌頂初夜表白／＼／＼／北院

六月御忌日 安樂寿院理趣三昧結願三首」ウ 1. ∴ ∴ ∴ （略）ウ 2. 小題並びに本文初行「静遍律師傳灌頂嘆徳大阿闍梨法印為人作

僧都／金剛乘佛子等異口同音言夫秘密灌頂之事／業者上根頓入之方便也神通之寶格 虚空／＼／＼。无边無界、字

面高さ約二三・四糎、每半葉八至十行内外、行字数不等、まれに墨の訓み（片）仮名等あり。本文末、次丁裏、縫紙墨

書を单枰（二四・三×八・二糎）に摸し、「右表白集一卷憑木村太七購得／之 此一冊。癸酉春 畠山牛庵、見せ申ひ所慈鎮和

尚筆ニ相極い故／西山へ相向別ニ一本写して此本ニ入置（む）正本へ／殿様へ指上ケ御道具ト成申ひ也／延寶八年庚申冬十一

月」と墨書。次丁表、縫紙墨書をやはり单枰（二五・三×九・二糎）内に摸して、云わく、「此壹枚ハ先年京都ニ而求之由（而）

古筆ノ表白集四冊内老冊之奥書也／右之老冊元禄癸酉之春畑山牛庵見之間是ハ慈鎮和尚之真跡／之由被申ニ付影写いたし御

文庫へ納元本ハ同夏五月廿八日／三木松与近藤氏（儀）太夫岡本津大夫遠山九十郎方へ中村新八（子）／御前へ被差上ひ様ニとの手

紙添指上被申ひ也但畑山牛庵方与之添状 一通指添遺ひ／元禄癸酉五月廿八日」と墨書。その丁裏「卷首二十葉者原

本附下卷之後半、焉今改修而二本葉復原型者也／第二十一葉右造立書写云云移下卷第九葉云云／昭和十七年大呂十一日夜

一校了／（注）ハ法ノ字也」と墨書。

卷下は、元表紙を单枰内（二五・一×一八・〇糎）に摸す。題簽等は卷上に同じ故、略。次丁表より、小題並びに本文初行「願書啓白（若宮御親病之時勅之）／夫以法力之拂魔障也甚於廻（へ）颺（アケル）之揚塵（アケル）仏／威之消衰厄也……」と。卷下本文末丁裏に「交本

批云／嘉禎四年三月十五日於大聖院御所／書写畢三位僧都本也故海惠僧都／草也／正和二十二廿一雖令交合猶有不審耳

／申請（ハ）」

巻下の「交本批云」以下の奥書に拠れば、この「交本」は、仁和寺大聖院にて嘉禎四年三月十五日に書写されたものであるが、「故海惠僧都」の草であり、「三位僧都」本であるという。仁和寺ゆかりの「三位僧都」として想起されるのが、禅覚である。禅覚については、『三僧記』撰者比定の推測を試みたこともあり、その稿に譲る（鎌倉初前期成立十二巻本『表白集』伝本の基礎的調査とその周辺（1））（『実践国文学』35号）。なお、禅覚関与の資料一点『僧申文』七巻の書誌的事項の紹介は、後述する。又、「三位」を冠した仁和寺僧が別に存在する。「三位法印」と称する隆澄である。

## B 山岸文庫蔵

海草集 存巻上・中 釈海惠撰

昭和十五年山岸德平氏令透写（拠高野山親王院蔵〔鎌倉頃〕写二帖）

大一冊

2297

褐茶表紙（二七・六×一九・五糎）、左肩、白楮紙を貼り「海草集」と墨書。右肩打付「親王院本<sup>乙</sup>本」と墨書。前遊紙一丁。扉紙に底本表紙を摸し、单边枠（約二一・八×一四・七糎）を設け、枠内左肩、「海草集上」、中央下方「西方院堯繼」、右下方「快春房之」と墨書、巻中もほぼ同様。目録、毎冊首に附す。「静遍律師灌頂嘆徳」道寛阿闍梨灌頂嘆徳／能寛律師灌頂嘆徳 同灌頂初夜表白／……／八幡理趣三昧 殷富門院被修故御室御忌日<sup>1.オ</sup> 六條局阿弥陀三昧 殷富門院弥陀三昧開白 同結願<sup>1.ウ</sup>（巻上）。小題・本文初行「静遍律師傳法灌頂嘆徳<sup>大阿闍梨法印權大僧都仁隆</sup>爲人作」／金剛乘佛子異口同音言・夫秘密灌頂之事業者／上根頓入之方便也……／……（巻上）、巻中も同様。無辺無界、字面高さ約一九・四糎、每半葉八行々十六・七字内外。朱の断句・朱引、一・二点、レ点（左寄）、送り（片）仮名等施すも、おそら

くは後筆にして室町以降か。又、墨の断句・訓み仮名などもあり。虫損など丁寧に摸し、底本の左下端破損を摸して一貫するものも、おそらく透写の故であろう。卷上、本文末、次丁裏に「昭和十四年仲呂晦半夜一枝至中途而已夜既三更ノ尔来<sup>（レ）</sup>得閑而時々校訂端午早旦一枝了ノ雨天陰暗氣肅森今 岸廼舎識ノ粘葉装 端立竹 鎌倉初期写本也 下卷欠」。卷下本文末、次丁裏、「海草集上中二冊 親王院藏本也 下卷欠ノ表紙端立竹 鎌倉初期写本也ノ白界ノ昭和十五年端午朝始校訂矣同十五日朝訖焉ノ俗事多端偷閑一読遂校訂者也ノ 岸廼舎識ノノノノントナリシモノナルベシノ隣家飼雲雀味且鳴比々執筆南窓下恰似在春郊」

昭和十七年八月廿四日訪彰考館見表白集ノ海草集完本也有綴誤矣即知編者海恵ノ也不 堪欣喜聊附記焉 南呂廿五、黄昏」と山岸德平氏墨識語。山岸文庫藏三二九六番の『海草集』と底本を同じくするも、この三二九七番の本は透写らしく誤字など少なし。

## C 同文庫蔵

海草集 存卷上・中 釈海恵撰

2296

昭和十四、五年頃写

大一冊

褐茶地表紙（二七・六×一九・六糎）、左肩、白楮紙を貼り「海草集<sup>上中</sup>」と墨書。右肩打付「親王院本<sup>甲本</sup> 不欠」<sup>不欠</sup>と墨書。前後遊紙各一丁（本文と料紙異なる）。扉紙、底本の表紙寸法を墨单边にて摸し（二一・五×一四・五糎）、左肩打付「海草集上ノ海草集中」、中央下方「西方院堯継」、右下方「快春房之」と墨書（いずれも底本にあり）、扉紙左肩打付「海

草集上」と墨書。二丁表より小題、次丁表より目録は、B本（二二九七番）と同じ故、省略。巻中も同じく省く。無辺無界。字面高さ約二三・五糎、每半十二行々十七字内外字数不等。一・二点、送り（片）仮名等あり。まゝ空格あり、鉛筆にて補写もあり。薄様紙を用う。B本（二二九七番本）と比較するにC本（二二九六番本）の空格箇所は、丁度、虫損箇所にあたるもので、当C本は、透き写しではなく、単なる転写本である。本文末に、山岸徳平氏墨識語あり、云わく「海草集二巻上中二巻／高野山親王院藏本也昨年孟冬依囑／于河本祐範氏 荏苒到今年経一年／誤字不少、十一月八日夜一校未果、他日須／再校補修者也」<sup>（別時筆）</sup> 旅行販途以校訂之故借覽販京矣別映字一本／備他日之研讃者也／高野山之僧侶筆写焉水原氏依囑之云云」と。後遊紙表、右肩「瘦鴈凌」などと墨書して墨にて消す、書き損じの反故紙ならん。

『海草集』影印紹介にちなみ、海恵関係の資料を二点、追記する。いずれも詳細な紹介は、別の機会に譲る。一点は、既に『東寺観智院金剛藏聖教の概要』に紹介のある『海恵僧都詞』一卷である。

#### 東寺観智院藏

海恵僧都詞（外題「嘆徳草」）

一軸

後補表紙（高さ約三一・三糎）、打付に「嘆徳草海恵僧都詞」と墨書。見返し、二三・五糎。内題並びに本文初行「海恵僧都詞／金剛乗仏子等異口同音言秘密灌頂之大道其源／遷哉流派、廣兮我朝雖貽八家之跡、相承……」と。無辺無界、字面高さ約二九・四糎、楮紙総裏を打つ。途中、本行を「――」の如く墨にて消す箇所多し、第一紙五二・〇糎、第二紙五三・二糎を継ぐ。勿々の間の閲覽でもあり、書写年代については、今後の検討に譲る。

次の一点は、亀井孝氏旧蔵『悉曇要決鈔』三卷三冊の本奥書である。当該書の原本の披見の機に未だ恵まれず、紙焼写真によって知られることのみを記すならば、巻下、奥に賢賀の補修識語がある、云わく

「右全部三帖者仁和寺号慈尊院南岳房湊暹之／所製尤此書希有也依虫損令弟子僧／加繕装収金剛蔵悉曇部秘函底訖／彼此可為秘蔵焉故勿忽云云／ 延享三年龍集丙寅季春朔旦／

大悉曇傳付資僧正賢賀俗齡六十三歳

と。後補覆表紙は、文様など、賢賀修補の東寺蔵本に一般に見られるもので、おそらく延享三年時の装訂であろう。書写奥書は、「應安二年三月廿四日以写本一交了／ 賢實」(巻上)、「應安二年七月廿日以海惠僧都自筆令校合了 賢實」

(巻中)、「本云文治五年六月一日於高野往生院書寫了／ 真言宗末学沙門海惠十八才」交了／ 應安二年三月日以海惠僧都筆迹書寫了／ 賢實」(巻下)と。海惠僧都自筆本を以て、東寺の賢寶が應安二年に書写交合したことを知るのである。巻下の「本云」以下の本奥書に窺知しうる貴重な点は、仁和寺の海惠僧都が文治五年(一一八九)六月一日に、高野山の往生院において本書を書写したことである。時に十八才であった。高野山の往生院といえば、常喜院心覚の住して名高く、その足下に信西一門の勝賢・成賢という醍醐寺僧が赴き、深賢も又足跡を残している。いわば、信西の血統とゆかり深い寺院であった。心覚と仁和寺守覚と勝賢との交流の親昵な面(「書物」を介している)を考慮するならば、ここ「往生院」に澄憲の息海惠が赴いて書物を写す行為は、至極当然なことであった。『悉曇要決鈔』巻下の本奥によって、海惠の往生院滞在を証しえたことは誠に喜ばしいことである。

付、禅覚・隆澄、及び東寺観智院蔵表白類一班

ここに、『海草集』撰者並びにその周辺に位置すると考えられる「三位」僧都禅覚、いまひとりの「三位」法印隆澄について、東寺観智院蔵本の二、三を中心に、書誌的な基礎調査報告を試みるが、その全貌の総合的な報告には、いまだ及ぶところではなく、今後の踏査研究に期すべき面が多い。

仁和寺守覚法親王の秘蔵の典籍にして、禅覚の係わる一冊が、仁和寺から出で、転写を重ね、東寺に伝来して現存する。醍醐寺僧深賢自筆の一点、『僧申文』七卷である。守覚秘蔵のこの貴重書を申し請けて書写したのが、守覚の許に出入していた側近の鳴瀧僧都禅覚に他ならない。醍醐寺僧深賢は、禅覚没後の貞永元年（一二三二）、その禅覚自筆本を以て書写したのである。

簡略に書誌的事項を記しておく。

# 東寺観智院蔵

僧申文 存卷四・五・六・七

貞永元年釈深賢写

146・1

一軸

奉書紙後補表紙（高さ約二九・二糎）、打付「僧申文」と墨書（「四五六七」を墨塗抹消）。見返し、斐交楮紙（幅約二五・五糎）に目錄墨書「〱申維摩會講師請教〱〱〱申大乘會講師請／僧〱〱下申修太元〱請 申灌頂請／申内供奉 申阿闍梨／。内題なし。本文「（一行アケ）／興福寺傳燈大法師經禪誠惶謹言／ノ請殊蒙ノ鴻慈因准先例依常住修学并云（八字空格）請勞被預今年維摩會講師請狀／右ム 謹檢案内・維摩會者・ノ國家崇重之大／……／ 康和二年四月日傳燈大法師位」。天地淡墨单边の烏絲欄、有界（界高約二三・七糎、界幅約二・一糎）、墨の訓み仮名・清濁声点、一・

二点等同筆墨にて附す。朱の合符等もあり。每紙幅約五三・八糧、約二五行。奥書「此書元七卷也私」と一行分墨書して、棒堅線にて消し、「此書北院御室御秘藏之本而鳴瀧僧都禪<sup>(寛)</sup>」／申出所書持也件自筆本今令／書寫了可秘藏也／之七卷也私改之被成<sup>(重書)</sup>阿卷了／件調卷様被示之／貞永元年仲夏十四日<sup>(朱書)</sup>刻未於地藏院書了／深賢／「同十六日點畢／以愚老之性優古人之草寫之／後見有情必可唱南無阿弥陀佛也／」と。又、軸の裏に「弘安十一年仲春下旬於／郁芳里亭一見了／正應元年窮冬初日末学沙門覺云<sup>(生年)</sup>十九／為休閑中之冷然又一見了」と墨書。紙背書狀、本文中の「卷六僧綱以下中……」の紙背に「貞永元年十三日於醍醐寺地藏院書寫了／同日移點了」と墨書。「按捺僧都御房」「地藏院御房」宛のもの多く、内容も醍醐寺末寺の山科定水寺関係文書が散見する。差出し人の僧名に道教のもの、弘<sup>(？)</sup>嚴<sup>(？)</sup>、隆澄のものなどあり、書狀中に「孝賢律師」の名も見える。

なお、奥書に「元七卷也」とある如く、毎卷、「卷五申大乘會講師請」「卷六僧綱以下申修太元法請」のような標目がある。

東大史料編纂所蔵本においても同様である。

東京大学史料編纂所蔵

僧申文 卷一・二・三

明治四十一年透写

特大一冊

3071-08  
・ 4

編纂所特製補強表紙(深緑厚手のものと茶色地のもの)、扉紙に「僧綱申文」と墨書。次紙裏に「僧申文<sup>(一三三)</sup>」と墨書、これはおそらく原本端裏外題を摸したものか(この一紙、後補)。目録「僧綱申轉任<sup>(敦光草)</sup>」／僧綱以下申諸寺司／凡僧申僧綱／。内題なし。本文「(一行アケ)／ノ請殊蒙天慈被叙法印大和尚位狀／右小僧<sup>(某)</sup>仰尋朝家之舊規<sup>(ニ)</sup>。俯考<sup>(ル)</sup>禪林之故實<sup>(ニ)</sup>……」／康和元年十二月日權大僧都法眼和尚位<sup>(朱)「頼親」</sup>／……。本奥に「貞永元年五月六日<sup>(申)</sup>刻於地藏院書寫

了』／(卷「同九日廻朱點了

鳥之』／

(別筆)弘安十一年仲春上旬於郁芳／里亭一見了／

末学沙門覚云春秋十九／

(この墨書の上に「正應元年仲冬下旬／重又一見了」と墨書)。透写の底本は卷子本、天地单边の烏糸欄(界高約二三・八糎、界幅約一・九糎)を施し、毎行十六字、墨の一・二点、レ点(中央)、清濁声点、訓み・送り(片)仮名を施し、朱の断句・朱引あり。奥に「右僧綱申文／相模國三浦郡葉山村小林高三郎氏／所藏明治四十一年十月影写了」と。紙背書状等、ほど、鹿子木庄に係する文書。「地藏院」「按察新僧都御房」宛の慶賀状などもある。

この『僧申文』七卷所収の「申文」は、全て敦光の活躍期に当たる時期のものであり、目録首の「敦光草」を考慮するならば、おそらく藤原式家敦光の遺草類を、「僧」侶の世界に与かる「何人」かが分類整理・配列したものであろう。藤原式家の儒者(敦経・敦周、等)と守覚法親王との緊密な交渉を知るならば、守覚周辺における「類聚」の氣運に促されて産み出された「書物」のひとつと考えることも十分に許容されるものである。

『僧申文』七卷の詳細にわたる内容・紹介は、院政期の鴻儒式家敦光の活動と関わることであり、東大史料本の底本にして深賢自筆本である大東急記念文庫蔵本の調査を俟って改めて行う予定である。ともかくも、本書の識語に拠るならば、鳴瀧僧都禅覚が守覚秘笈の典籍をも借出し書写しうる位置関係―側近中の側近―にあったことを証しているのである。禅覚の『三僧記類聚』撰述・編纂という「類聚」作業が、式家敦光の遺草に基づく僧侶範例用の「類聚」の産物、秘書『僧申文』七巻とも深く結ぶものであった可能性を指摘しておく(「詩文」の「類聚」運動とも重なってくる)。守覚周辺の学芸(歌林苑の活動、源義経からの聞書類なども含む)も又、大きくは、この院政期以降の「類聚」運動(八帖本平家物語などもこの「類聚」作業の只中にあったことは確実である。大雑把な臆測を逞しくしてみるのである)に領導される、一筋の流れであったとも考えられてくるのである。

次に「三位」法印隆澄の与かること確実な典籍二、三について述記する。第一に挙げるべき書物は、東寺観智院蔵『表



白御草』存巻下一軸である。

東寺観智院蔵

表白御草 存巻下

146・2

〔鎌倉〕写

一軸

具引き表紙（高さ約二八・九糎）、打付に「表白御草下

理趣三昧  
佛名

供養法  
出家

御讀經  
式講

」と墨書。見返し、幅二三・〇糎に目録

墨書「建春門院理趣三昧開白表白／同結願事由／法皇奉為建春門院理趣三昧表白／同結願事由／觀音院灌頂後朝供養法表白／南御室佛名後朝供養法表白／神泉御讀經表白／内御佛名表白／宮御出家戒師表白／往生講表白／舍利講表白」。内題なし。小題並びに本文初行「建春門院理趣三昧開白表白／夫般若理趣經者以遍照薄伽為其教主以自在王／宮為其說場金言……」。無辺無界、字面高さ約二五・〇糎。第一紙幅四一・五糎、十八行々十九字内外を除き、每紙幅約四七・五糎、二十二行内外であるが、第十一紙四五・〇糎、本文七行を以て了わる。送り仮名・訓み仮名、合符、清濁声点、頭書等、本文同筆にて附すが、まゝ別筆交じるか。楮紙、紙背に「アマコヒ」などの訓を墨書、紙継目に縫印「冪」（单杵墨文印）あり、奥に

「同年四月三日於仁和寺北長尾房逢三位法印隆澄讀之了／重加點了／」

一交了／』

法印云此御草三局寺中猶以無披露尤可秘藏云云／』

建長六年二月十二日於遍智院北窓以三位法印本  
我々本／馳筆了

桑門侶覺也」

と墨書。本文とほぼ同時筆、墨色や、異なるもの交じるか。

この一卷には、その僚巻巻中と覚しい一点があり、既に山崎誠氏「建長六年書写覚洞院法印親快筆『表白御草』（『国書逸文研究』16号 昭和60刊）の紹介・翻印が存する。簡略な書誌事項のみを記す。他は、山崎氏御論に譲る。

西尾市立図書館岩瀬文庫蔵

表白御草 存巻中

辰・66

〔鎌倉〕写

一軸

具引き表紙（高さ約二九・〇糎）、打付「修 表白御草中堂供養御修法 尊勝陀羅尼供養」と墨書。見返し、幅約二二・五糎に目録「八

條院常磐御堂供養表白／院尊勝陀羅尼供養表白／高倉院尊勝陀羅尼供養表白／公家孔雀經御修法表白／中宮孔雀經御修法表白／同結願事由／院孔雀經御修法表白／同結願事由／公家愛染王御修法表白／法皇愛染王御修法表白」と墨書。（この

目録下方右より、「日野柳原秘府／修竹記之印」へ単梓朱文印、七・〇×二・七糎、「日野柳原／秘府圖書」へ単梓朱文印、五・八×一・五糎／その左「岩瀬文庫」印あり。内題なし。小題並びに本文「八條院常磐御堂供養表白／夫銀兔離畢カ、ル陰雨灑而滂沱ハタタリ 彩龍翔虚騰雲／……」。無辺無界。字面高さ約二四・七糎、全巻肌打ちを施す。背記あり。奥に「建長六年四月四日於仁和寺北長尾房逢于隆澄法印／讀之？し時重加點了 親快／」

一校了／』

法印云此御草寺中猶以無披露尤可秘藏云々」と。

隆澄については、『仁和寺諸院家記（心蓮院本）』（『仁和寺史料、寺誌編一』一七七頁）に

「／理智院／

……（略）……

海惠僧都　／　大円房、澄憲法印眞弟子、北院御室御付法、

良遍法印　……………

忠遍法印　……………

前大僧正隆澄　☐☐☐☐☐☐、／三位、忠遍法印舍弟、良遍法印〔重〕受法資、金剛定院御室御付法重受、一長者」

とあり、恵山書写本「理智院」の項に拠れば（右同書、二七三頁）、

「前大僧正隆澄　三位、忠遍法印舍弟、良遍法印付法、金剛定院御室御付法重受、

一長者、建保七年四月八日、於理智院受灌頂於良遍法印、弘長元年十月廿九日、加任三長者、文永三年五月廿三日、

寺務・法務・護持僧　宣下、同十一月十七日、卒<sup>八十</sup>、或文永十一年十月廿七日、入滅」

とある。

この隆澄は、守覚の撰述書類を多く披見・書写しており、和田英松氏『皇室御撰之研究』（昭和6・4・25刊）には、次の如くその名を拾うが、『左記』『右記』『追記』は、いずれも群書類従所収本の奥書である。

・『北院御室拾要集』の奥書に

「文永二年七月七日、於鳴瀧御所書寫畢、同八日一校了、隆澄自今二月至當月、此御記之類十一卷蒙赦免了、為百日御手替之忠賞由、被仰下者也、卷々添燈、事々消暗、古之賢慮、興今之恩賜、兩感遮心、双淚瀝手、倩思五十年之習学、不及三四月之披閱、　理智院僧正御房自筆本也、」

・『左記』の奥に

「文永二年七月二日、於鳴瀧御所書寫畢、同三日校合了、隆澄」

・『右記』の奥に

「文永二年七月二日、於鳴瀧御所書寫之、同三日校合畢、隆澄」

・『追記』の奥書に

「貞應元年十二月廿五日、以故僧正御本書写之、権律師信什／信什者、大慈院僧正云々、故僧正者理智院僧正隆澄云々」とある。

『表白御草』の撰者は、隆澄と同じく理智院に住した海恵（角田文衛氏に御論あり）の可能性は高いが、三位僧都禅覚も又、その資格を十分に有するひとりである。年齢などから推して、禅覚の方が適うのではないか。北院御室の御注を禅覚が抄した書物も伝存している。和田氏前掲書五八三頁に

「計注／諸尊法の御注を禅覚の抄録したるものなり。毗張藏聖教目録に、計注諸尊法奥書  
澤見末書、三帖、中巻入／奥右計注者、北院御室御注、三位  
禅覚僧都抄給也、則僧都御房以自筆之御本、書写校合了、／大法印兼性改頭證」とある。『僧申文』七卷などのことを併

せ考えるならば、禅覚撰述の可能性も看過し難いのである。禅覚については機を改めるとして、仁和寺僧隆澄と醍醐寺僧親快との交流は、『表白御草』の奥書に知られるが、新たに一点の資料を披見したので紹介する。建長六年写『表白集』一卷（『一誠堂古書目録』〈平成2・12・19刊〉）の奥書に

「隆澄僧正草随見及少々類集之即對僧正／問不審任彼口説少々重勘付之甚見芳／不可／及外見穴賢／／  
建長六年 五日 親快」

と親快の奥書墨書がある。その直前に存する墨棒塗抹消の奥書とは、墨色を異にし別時筆である。抹消された奥書は判

読しうる限りでは次のように読める。

〔理〕  
□智院僧正

。〔此・御カ〕十一通  
遺草。

随見及少

〔集之雑々啓白等／別厨集。猶随見人〕加之即勤・僧正讀之加點了／

建長六年二月廿五日記之 親快

とあり、醍醐寺僧親快は、隆澄僧正の草等を「随見及少々」類集したことが知られる。更に「対僧正」「問不審」、彼口説に任せて「少々重勘付之」ともあり、直接、隆澄に對面して、不審な点を問い直したことがわかるのである。しかも、この遺草類集も、「対僧正問不審」も、「勘付」もすべて建長六年二月廿五日の時点では、終了していたことになり、先立って行われた親快と隆澄との交流は、親しく久しいことが知られる（師弟の関係である）。「建長六年二月廿五日」といえば、『表白御草』巻下の奥書「建長六年二月十二日於遍智院北窓以三位法印本抄本／馳筆了 桑門（？）侶覺也」に存する「建長六年二月十二日」に遅れること十余日である。建長六年二月十二日の時点における親快は、隆澄の本を「或人本」という隴げな認識の許に書写するには余りにも隆澄に近い位置にいたことが判明するのである。「侶覺」写（その転写）の可能性の残る『表白御草』の原本に即した更なる検討を期す所存である。なお、一誠堂古書目録によれば、『表白集』一巻の紙背には親快自筆の書状控えが二通存するようであり、『表白集』の全貌の紹介が俟たれるのである。

隆澄の与かった法会の表白類については、更に一点の典籍を紹介する幸を得たので、附記する。大曾根章介氏蔵『表白水丁』一巻であり、隆澄の文永年間の灌頂の際の表白類数首の文範が認められる（既に、近時、小峯和明・山崎誠阿氏編にかかる「表白願文年表」が公刊されそれに収載）。

以下に、東寺觀智院蔵の表白類の二、三と同蔵の『聖財集』『秘密持問』を紹介するが、詳しくは、機を改め（本誌次号以降など）言及する予定である。

東寺観智院蔵

表白集 十二卷（欠卷四）

〔鎌倉後期〕写

十二帖

包紙、表に「寶蓮花寺亮尊／上人真蹟也／表白集 十二冊」と打付墨書。共紙斐紙表紙（一五・七×一五・五糎）、左肩打付に、

「  
表白集第一 結縁灌頂三昧耶戒  
同初夜  
傳法灌頂初夜」

と墨書（本文同筆）。見返し剥れ。小題並びに本文初行

「  
表白集第一 結縁灌頂三昧耶戒  
同初夜  
傳法灌頂初夜」。

斐紙粘葉装、両面書。单边（一二・六×一三・一糎）有界七行（幅約一・九糎）の白界、行十一字、本文同筆墨のレ点（中央）、訓み、送り仮名あり。朱の断句などあり。

本書は、仁和寺守覚周辺において類聚された十二巻の表白「総集」とも称すべき模範文例集であり、巻四を欠くものの、巻七を有して貴重な古写の善本である。詳細な紹介は、別に予定している。なお、別に二十巻本『表白集』の存すること、追記参照。

東寺観智院蔵

表白集  
写

一冊

286・15

共紙斐紙表紙（二八・三×一七・三糎）、左肩打付に「表白集一卷」と墨書（本文同筆）、表紙右端、幅三分二ほど薄紙を貼る（かなり古いか）、右下墨（署名）書あるも消える。見返しに目録、「八祖供養表白各一首弘法二  
廿一日 二 / 上醍醐御影堂供養法二首 灌頂誦經導師表白 / 同嘆徳 灌頂三昧耶戒表白 醍醐 / 同初夜 同嘆徳返答  
清淵一 / 同嘆徳 観音院灌頂大阿闍梨嘆徳 / 宮御灌頂誦經導師表白 准胝堂曼荼羅供養表白 / 東寺安居供養法表白 観  
音院灌頂令戒導師表白 / 願文一首 諷誦一首」と。小題並びに本文初行「六種導師表白 / 龍猛 / 夫以式觀密藏之元始  
遙尋上乘之玄風龍猛 / 大士開鐵扉……」。单边（二一・九×二一・二糎）、有界（幅約一・八糎）七行の白界、本文八行  
字面高さ約二六・四糎、天地の界線を超える。厚手（楮交）斐紙、両面書、元は綴葉、現在は仮綴、應保や治承の年号を  
みる。奥に「元久二年壬七月十七日□□」許於往生院書写之」と。

その他に、『理趣三昧』表白集』一卷（欠前後）、『高野結界啓白』一卷などあるが、詳細は機を改めるとして（紙幅の都合あり）、ここには、鎌倉時代写の安居院資料を一点紹介し、併せてその周辺資料一点を掲げることとする。

### 東寺観智院蔵

表白集 安興院

寛元四年釈巧海写

枅一帖

145・1

共紙黄（斐）紙表紙（一八・六×一九・五糎）、左肩打付に「<sup>三帖内</sup>善□<sup>善傳</sup>」と墨書。見返し、左端に「初不  
二葉 三大 四地 □阿<sup>五</sup> 六放 七尺」と小字墨書。目録「表白集<sup>善傳</sup>安興院 / 平治御逆修一 同結願二 / 嘉應御逆修三  
治承御逆修四 已上 / 同結願五 寿永御逆修六 / 天王寺御逆修七 待賢門院御忌日八 / 鳥羽院御周忌表白 / 建春門院  
仙洞

御陰貝経供養十／同院千日御講結願十一／同院御周忌中男女房一品経十二」<sup>1. オ</sup> 奉為同院百箇日御八講結願十三／奉為同院撰州千僧供養十四／為鳥羽前大僧正追善十五／為頼曲御師追善十六／ 已上院中御修善」<sup>1. ウ</sup>と。内題なし。篇題並びに本文「一 平治五十日御逆修三七日表白／南瞻部州大日本國太上天王抽／叡慮之懇念……」。無辺無界、字面高さ約一六・五糧（第一葉表）、七行々十二字内外不等。毎葉大小あり。

この『表白集』には、次の如き解題がある。

「又、寛元四年（一二〇五）<sup>〈マ〉</sup>巧海書写の本（一四五①）は、内題に「表白集<sup>安興院</sup>」とある。「安興院」は未勘であるが、或いは安居院太念の謂であらうか。太念は「真興——利朝——太念」と小島流を承けている。」（『東寺観智院金剛藏聖教の概要』四講式・表白類〈築島裕氏担当〉、53頁）

目録を一覧して直ちに安居院流の唱導書『転法輪抄』の「後白河院上」の十四至十九、廿五至卅二に該当することが知られる。寛元四年（一二四六）という書写年時は、聖覚没後間もない頃であり、『転法輪抄』成立の過程を考える上で極めて重要な資料である（詳細は、山岸文庫蔵『練行啓』などと共に、別稿）。聖覚編纂以前に個々に「表白集」として纏められていたものを、聖覚が「類聚」・整理・蒐集を加えたものの如く考えられるのである。

聖覚と神道縁起書との交渉を考える上で貴重な一点を叡山文庫天海蔵本から紹介する（同蔵『合譬集』〈京都大学文学部蔵本と対校の上〉の翻印と併せて影印公刊を予定している）。

叡山文庫（天海蔵）蔵

宇佐宮縁起

貞應二年写（挾安居院聖覚法印本）

大一帖

天・外・17・21・303



栗皮後補表紙（二六・五×一六・六糎）、左肩打付に「宇佐宮縁起」、右下に「天海藏」と後筆同筆墨書。見返しは、本文共紙剥れ、右端糊代にかかり、鎌倉期の墨書あり、云わく「宇佐宮縁起傳教大師床法記 冊八ヶ□ハフあ（？）（？）（？） 校了 来迎院／

宇佐弥勒寺縁起」と。内題並びに本文「宇佐宮縁起 「山門藏本」(双杵淡墨印)、「天海藏」(墨署)／八幡垂跡之根

本者大隅國始天雨八流之幡云正八幡／宮是也……／……」。单边（二三・七×一四・〇糎）有界（界幅約二・〇糎）の白

界、半葉七行々十九字内外字数不等。斐紙、粘葉装、両面書。途中廿一丁裏に本奥「長承元年十一月廿一日直講清原真人

宗安／廿三日被申讃岐（？）（？）宣旨了 □家「才量他系被仰下了」／とあり、次行から別筆一校、奥書「貞應二年三月廿五日

校了 □□」とあり、四六丁才本文末に「貞應二年三月十三日次聖覺法印本書之文字不正／不被讀解可交他本也（空）（寂カ）」と墨書（本文同筆）、その左傍小字別筆にて「校了」と墨書あり。（澄定）（空）

「校了」と墨書（本文同筆）、その左傍小字別筆にて「校了」と墨書あり。

# 東寺觀智院藏

聖財集 三卷 釈無住撰

〔室町後期頃〕写

大三冊

146・17

楮素紙表紙（二六・三×一七・九糎）、左肩雲紙（短冊型）を貼り、「聖財集上（中・下）」と墨書。右下方に「宝持院本」と後筆墨書。見返し本文共紙。目錄なし。内題並びに本文「聖財集上／浄名経云塵勞之儔（す）如来種也（迦葉語也） 無行経云貪／欲即是道悲癡亦復然（菩提菩薩語也）……」。聖財集中／第六解行四句／ 有解無行 有行无解（阿闍世中品）……」。

「聖財集下／第十禪教四句（顯密聖道浄土有相 无相）知禪不知教 知教不知禪（兩單 中品）……」。

無辺無界、字面高さ約二三・〇糎、每半葉九行（首丁表八行）々二十字内外、漢字片仮名交り。尾題並びに奥書、卷上、「聖

財集上」本云 正安元年巳亥六月下旬之比為初心同法病中如形ノ草之志為初心行人也ノ佛陀神明冥助加護廣利群生同入法界耳ノ東寺末流金剛仏子道曉俗年七十四才僧夏藤ノ六十(マ)房号一圓道号無住」本云凡夫習ヲノ理ハサルヘケレトモホシカラス野老ノ苦ク人ノ惡キハノヨシサラハ物 二人ヲ惡シト思ハレヨ我身モケニハ善モナケレハノ 寄月述懷ノ浦山シ同シ浮世ニ廻レトモ月ハ雲井ノ上ヲ行哉ノ 山家月ノ山陰ノ谷ノ庵リハウカリケリ月ミル程ノ空ソ少キノ 閑亭月ノ獨栖宿コソ月ハサヒシケレ必ス山ノ奥ナラネトモ。卷中、「聖財集中」。卷下「……〳〵……初心ノ同法ノ為愚意ノ法門手ニノ任テ記了先年沙石集十卷在家ノ愚僧ノ為ニ草ノ案ノ侍シ老病ノ懈怠再治ニ不及ニ世間ニ披露心ノ外ノ事也此モ又八句ニ及テ病中ニ記ノ同法ニ授ク若世間ニ披ノ露ノ達人ノ賢覽ニ及ハハ邪ヲ削リ正ヲ助テ同ク佛乘ヲノ讚ノ共ニ群生ヲ導給ヘシ此則愚老志耳ノ于時永仁七年巳亥孟夏下旬之候集之ノ

林下貧士無住七十ノ聖財集下」。

# 追補

東寺觀智院藏『天台秘密持問上』を閲覽しえたことを以て、以下に、旧稿の若干の追補を行う。

『秘密獨聞鈔』の伝本

- ① 寛永寺藏大正六年写一冊
- ② 叡山文庫真如藏藏〔近世前期〕写横一冊
- ③ 叡山文庫毘沙門堂藏〔近世前期〕写大二冊
- ④ 大谷大学図書館藏〔近世〕写大一冊
- ⑤ 西教寺藏 写一冊
- ⑥ 身延文庫藏〔室町〕写『北谷秘典』ノ内

⑦東寺観智院(金剛蔵)蔵「室町初」写『秘密獨聞鈔』半一冊(外題「天台秘密持問上」)

①から⑤は、既に「『三國伝記』周辺の一学僧」(『東横国文学』16号、昭和59・3刊)にて紹介、⑦は、その存在を既に真鍋俊昭氏が紹介、近時、⑥⑦二本を調査したので、簡単に紹介する。

⑥身延文庫蔵「室町中期頃」写『北谷秘典』大四冊(第三冊ノ内『秘密獨聞鈔』二卷)。素楮紙厚手後補覆表紙(二七・三×二一・七糎)

第三冊、題簽を貼り「北谷秘典<sup>自十一</sup>至十九合ノ三」と墨書。収載の篇目を左に掲げる。

「三句血脉見聞」、「一心三観<sup>慧意</sup>」、「北谷秘典<sup>四ケ</sup>」(内題「北谷秘典十帖之内」、目録「鉄撰書／止観大底事／心性之事／止観事／仏神事」と)、「一心三観私見聞<sup>第三</sup>」、「常行堂口伝」、「金夷撰書<sup>一心本有生死等ノ六ケ</sup>」(内題「鉄撰書」、目録「一心本有生死事／一念三千証掘事／普賢弥勒一体事／五千起去事／妙法蓮花題名事／心地修行之事」と)、「秘密獨聞鈔<sup>上</sup>」(奥書「御本云ノ于時明德第四大才癸酉十一月廿四日於大日本国ノ近江国比叡山延暦寺首楞嚴院第三<sup>(権カ)</sup>栴尾ノ谷花光房任本写之」云々ノ<sup>(マ)</sup>頭少<sup>(少)</sup>大伝燈位能賢法印賜之」と)、「秘密獨聞鈔<sup>下</sup>」(奥書、巻上にはと同じ、「頭少」〈巻上〉が「頭六」〈巻下〉)。

「当途王経之事」を以下に全文引文することは省略し、次に紹介する東寺観智院蔵本所収の「当途王経事」と併せて、大谷大学図書館蔵本と簡略な対校を試み、異同一覧を掲げて別稿とする予定である。「当途王経之事」に関しては、身延文庫蔵本・東寺観智院蔵本のいずれも、大谷大学蔵本に全文合致し、個々に若干の異同を示すに過ぎない故である。

⑦東寺観智院(金剛蔵)蔵「室町初」写『秘密獨聞鈔』<sup>存卷上</sup> 半一冊

本文共紙楮紙表紙(二四・四×一六・一糎)、左肩打付「天台秘密持問上」と墨書。目録「大師臨終行相事 靈鷲山事ノ天台山事……………」(オ<sup>1</sup>オ<sup>2</sup>)。内題並びに本文初行「秘密獨聞鈔<sup>惠光院</sup>二ノ内上<sup>随面授經之唯</sup>南無十方常住一切三寶ノ南

無三千是成覚満如来／ 四弘／ 大師臨終行相事／弘決一云至<sup>ル</sup>石ノ城ニ謂<sup>ニ</sup>徒衆ニ曰大王欲<sup>ニ</sup>使<sup>メ</sup>吾来／……」。無辺無界、字

面高さ約二・一八糧、每半葉十行々十九字内外、レ点(左)、一・二点等、送り仮名、訓み仮名、本文同筆墨にて附す。尾題

「秘密獨聞鈔<sup>三ノ内</sup>」と。その次行から「云右於比両卷書者惠光院之獨一面授口決而不載<sup>云私</sup>之書也雖然為<sup>マシ</sup>予<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>隨<sup>ハ</sup>聽<sup>ハ</sup>

聞<sup>ハ</sup>法<sup>ヲ</sup>大<sup>ニ</sup>。概注書全非他<sup>所</sup>用／但入壇相兼不極一流之源底者敢不可許之各不然者／山王大師之御誠難謝者也只深為懷中之

秘決永可為成仏／種因努々不可及他見可秘々々穴賢々々矣／建久四年青陽沽洗下旬候」と墨書あり、丁を改めて「血脈

次第／」中納律師忠快<sup>後任大僧都</sup>伝三位僧都頼尋々々伝附治部／卿法印。快……／々々伝民部卿律師宗弁々々授与辯阿闍梨瑤

訖／

。惠光院知死期大事亦云閉眼大事傳云……／(略)……／も治元年六月一日於比叡山東塔北谷惠光坊令伝授之畢／

一眼光者は七日中定知法之……／……／于時永徳二年<sup>戊壬</sup>潤正月月中旬之作出相<sup>ツ</sup>相<sup>ツ</sup>鎌倉鶴岳若宮別／当坊西南院一<sup>ツ</sup>毛龜

□ 染鶴筆之 執筆 賢範／……／(伝授血脈)……／……／宏祥——行秀——希勝——明海——幸栄——良範／も瑤

(瑤誉にて血脈了)と続く。

又、真言宗に流传した「当途王経ノ事」について、新たな二本を紹介する。

一点は、真福寺宝生院大須文庫蔵「室町」写『釈迦法華御即位法』一軸である。

大須文庫蔵『釈迦法華御即位法』

「室町」写

一軸

共紙（無表紙）端裏外題「釈迦／法華御即位法四重上」と墨書（本文同筆）。楮紙、無辺無界、字面高さ約一三・四糎。内題並びに本文、「法華御即位法亦云青龍灌頂法付顯密二法習之／先授五眼／第一智拳印 阿是天眼／西州寶都領／……／已上两部大日如来女吒祇泥男吒祇泥畢／始淡路国前西海道次南海道次東海道／……次山陰道是名四海印也／次授十善戒如常／次授法華法 亦云釈迦法／方便品智拳印／十方佛土中唯有一乘法天子天上義也／安樂行品無所不至印／觀一切法空如実相天子可有智慧義也／寿量品塔印／佛語実不虛如醫善方便天子不妄語義也／普門品引導引／慈眼視衆生福聚海无量天子可有慈悲義也／已上天台御即位法畢／此天台御即位法者大唐周穆王王乘八／疋駒飛翹靈鷲山法花說法會座時／釈迦如来曰汝雖得帝王位未知可持国土／大法故依為法器授此、四要品□□□／句畢自其以來大唐及日本弘大法也／天竺以尺迦如来為元祖也是偏我朝天／照大神利法也能説教主尺迦亦大神化／身也能々可秘之也於本所方聞名字／亦不傳知此法秘法也故能々納箱底／勿外見矣／

文和二年乙未正月廿一日  
いま一点は、同じく宝生院大須文庫蔵元弘元年（か）写『普問品當途王經之事』一通である。

真福寺宝生院大須文庫蔵『普門品當途王經之事』

元弘元年写か

一通

近代の包紙、中央「普門品當途王經之事 第六十一合」と墨書。折紙（一紙29.5×48.0 cm）表の端裏、下方「覚俊」と墨署名（本文同筆かどうか）。字面高さ約二七・〇糎、二十行々二十五字内外、送り仮名、一点等、本文同筆にて附す。楮交斐紙か。

「普門品當途王經之事／當時穆王一卷經給故也周穆王乘八疋駒國土遊行給詣靈山會上／給折節普門品說時也其時釋尊向王授給經也所謂薩達摩／分陀利。祖多監也傳此文。周穆王秦始皇至王秘法傳此御時慈童／云童帝御氣色不及云或時此童王御枕越見法令可捨深山／事也不及力王此童件薩達摩文教放捨七百歲齡延成仙人一名方／祖云々此仙人家菊此流水吞人三百餘家五百歲齡延云云依之尋河山此仙／人日本國聖德太子觀音再誕也南岳大師化身也南岳觀音ト異義而太子已後彼普門品文以四海水灌頂代帝傳給也當今不絶／也此文撰政傳王奉授也如此秘文之事普門品中有之薩達摩分陀利迦祖多監當文也／／／抑密教高祖弘法大師尺此經曰妙法蓮花經者今真言宗意據金剛頂經……／／

元弘元年九月廿五日 授覚俊

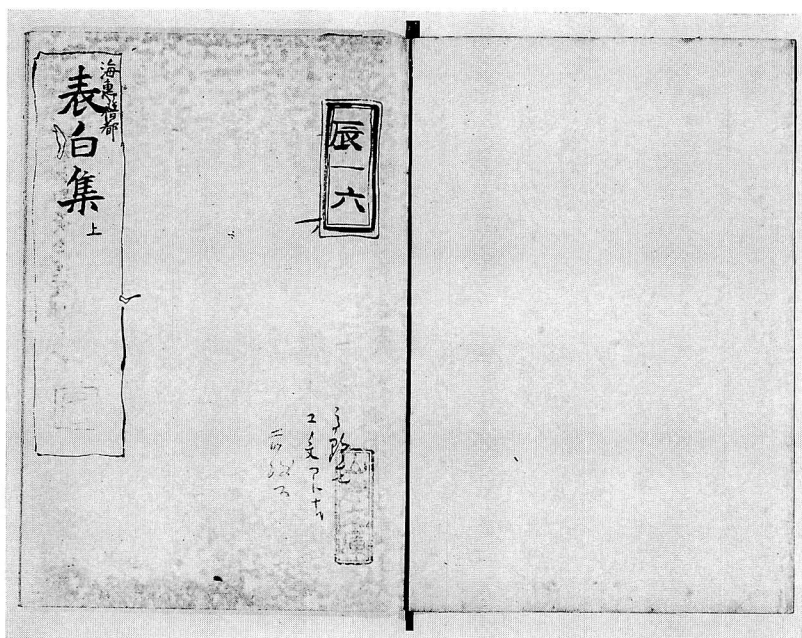
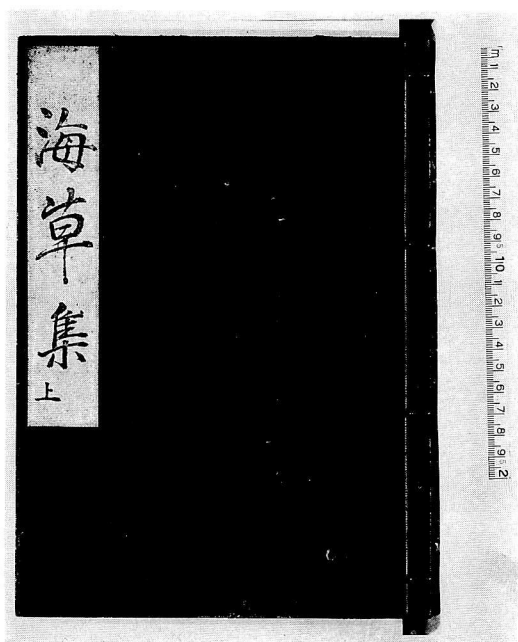
なお、性心撰かと覺しい東寺観智院蔵『秘藏寶輪聞書』五卷を調査しえたが、静嘉堂文庫蔵『排蔵授寶鈔』零本一冊は、その『秘藏寶輪聞書』の卷之二に相当するものであり、訓点など殆ど同じであることから、静嘉堂本の底本に当たるものではないか、とも考えられる。

## 〔追記〕

聖教類の「類聚」作業が、とりわけ隆盛をみたのは、院政期から鎌倉期にかけてであるが（神奈川県立金沢文庫保管「二十卷本『表白集』」（仮称）は、院政期の仁和寺周辺における類聚の可能性を秘めたものの、その篇名一覧を始めとした詳細な紹介は、高野山図書館蔵（金剛三昧院）の二十卷本『表白集』と共に別稿に譲る）、諸坊常什の文範類聚は、当然のことながら、繰り返し行われた筈である。一例を挙げるならば、叡山文庫蔵（真如蔵）「近世」写『牒状類集』大一冊（東大史料編纂所に影写本存）がある。建保五年の一通の他は、元亨・元徳年間の叡山の牒状類を素朴に類聚したもので、

元徳二年四月日付の「玄恵僧都草之」とする一通もあり、既知のものではあるが、『入木口伝抄』所載「戒牒事」と併せて興味深い。又、本年報七号所載の「一切設利羅集」には、東大寺図書館蔵「幕末頃か」写『一切設利羅集』存卷四大一冊が現存することを追補する。本行は、おそらく、山岸文庫蔵「平安本・鎌倉初頃」写本に発したものであろうが、その十二丁目迄に施こされた右傍「イ」本注記には、独自異文等が多く、山岸文庫本の他に異本と称すべきものの存したことを証して、貴重である（詳細な異同箇所は別稿に譲る）。更に東大寺図書館蔵「鎌倉初頃」写『母徳事』零葉一紙（梶型粘葉装——いわゆる「説草」仕立て——の零葉）は、かつて紹介を試みた仁和寺蔵「鎌倉」写『釋門秘鑑』梶一帖の「母恩勝父恩釈」に関連するもの、「母徳勝父」の證文を列記して興味深い（同寺図書館蔵「阿闍世王先世仙人ノ事」と共に詳細な報告は、別に用意している）。東大寺図書館蔵保元三年釈弁昭写『新修浄土往生伝』一帖や金沢文庫保管「安然和尚所生記」（鎌倉期の神道書『日本得名』は、他本を底本にして全文紹介予定）など、今後の「説話」研究に重要な問題を提供する資料であり、又、三千院蔵「近世」写『三僧記』を披見することをえたが、内閣文庫蔵本と同系統の一本であることが判明したので附記する。併せて「元刊」ともいわれる『新編連相搜神廣記』（北京大学図書館蔵。原本影印本未見）の影印本について、大塚秀高先生より御教示をえた。提供下さった資料によって、かつて推測したところの「元板画像搜神広記前後集」の存在を仮定するならば、本邦受容時期にとどまらず唐土における更に遡った種々の可能性を考慮せねばならないことになる」（『実践国文学』38号51頁）ことを確認しえたことを慶ぶ。『論語發題』所引「搜神記」独自異同八他本全て異なる箇所六ヶ所が全て「元」刊本に合致、但し、『發題』所引箇所と異同あり且つ他本に合致するものもあり、おそらくは、いわゆる「元」刊本系の一本にして別版が舶載されたと考えるべきか。十四世紀に遡る舶載時期を考えるべきか。以上である。

なお、貴重な典籍類の紹介引文の御許可を賜りました諸寺・諸機関に対しまして、厚く謝意を表する。東大寺図書館蔵の諸資料については、石井行雄氏・東野治之先生の御教示を載いたことを銘記し、深謝する次第である。





上卷欠題矣今便宜附之

卷六

靜遍律師灌頂儀  
能義律師灌頂儀  
衍遍阿闍黎灌頂儀  
完後闍黎灌頂儀  
佐修灌頂家戒道師  
漸教儀六首  
北院月御念目  
道多阿闍黎灌頂儀  
同灌頂初夜表目  
同灌頂初夜表目  
同灌頂上阿闍黎灌頂  
佛名後期儀表表  
華嚴經起三昧經首

八幡理起三昧

六條月御儀三昧

磨面院灌頂儀

八幡院灌頂儀

同院灌頂儀

同院灌頂儀

同院灌頂儀

同院灌頂儀

同院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

磨面院灌頂儀

仁院陛下 中興皇帝 聖訓  
公院政院為朝廷忠孝之者  
內政忠  
臣院陛下 忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者  
忠臣忠孝之者

世紀三事所  
 何處來 明史文  
 金中條  
 明通治縣志 多方獻文  
 縣志十卷 事新縣志長叙  
 為金局同年 後從長叙  
 又海行錄 益新縣志  
 二世同治十三年志長叙  
 又  
 明史文  
 世紀三事所  
 何處來 明史文  
 金中條  
 明通治縣志 多方獻文  
 縣志十卷 事新縣志長叙  
 為金局同年 後從長叙  
 又海行錄 益新縣志  
 二世同治十三年志長叙  
 又  
 明史文  
 世紀三事所  
 何處來 明史文  
 金中條  
 明通治縣志 多方獻文  
 縣志十卷 事新縣志長叙  
 為金局同年 後從長叙  
 又海行錄 益新縣志  
 二世同治十三年志長叙  
 又  
 明史文

是所望于清先生也又  
 愿孝之志全郭之族  
 于德意而嗣祀知孝悌  
 中於清先生也  
 此札之可謂有國情又  
 中夫之數者付其明訓又  
 是所望於清先生也悌  
 為郭氏所望也  
 事清先生家書卷之四

韓通律師傳法頂嘆德大周崇信寺僧  
金對案佛子求異口同音言文秘密頂之事又作  
業者上根頓入之方便也律通之寶格凌虛空  
殺意則至前誦金對肉庫排開錦容身  
則達究竟法今之妙用也誰疑若龍席之  
嵐雲深奧之儀則也余臨子獲若牛麋之  
角教之擇持不甘然子愛現前大門金耶  
活中大驚信持便都兩顛傳燈則托九枝  
之先五執瀉水濕於土葉之波蘭陵之風謀句  
身爲重於禪室行圓之月爲光殘暉方

破瓦八壁手執萬丈之降惠澤之阮力  
一門之長龍神之致感應之灑甘雨而速除  
九列之慈安實先佛家之棟梁法衣之領袈  
袂方今之時勢傳以不投者毗盧遮那  
上教振本密契災異報之飭道儀而許  
新舊國禁之指上人位仗惟受者弟子行密  
滿雖為善男善女之財氣鎖作之飽重入  
三部五部之壇場忘身保求教慣常帝行  
束之志竭心更受之希冀有還西之蹤  
珠母之悲年先楚山之卜心鏡淨淨淨

新為秦晉之上加之靈微外雲霞長新  
於煙中煙中寒清月廢後木上座  
霜雖不隨我之離不稱歎之仙寧寓風  
群散作踟躕之禮

道寬門國泰傳滿道順堂德

金對前佛子不異同音言削漸階與受一  
位号之授職越厥論与浴五佛親之滿名  
淨願拔觸注願實方以邦先以住者自任  
力加持三昧汲月泥元院依者師賢何注西

脉相承自中第及過城竹惟土地各振之  
待護念之紺羅之頂之別輪王長子灌海  
水自白馬之上白之別滅之如朱松廣以  
拂著也交現前之阿闍梨耶二六之真唐  
郎月之餘光再耀佛月健產有不定之  
悟期之宣一人之致密勢非唯芳仙掌  
利根之許之可之障之樂之儀道儀之  
之官壇場之變之元般婚之傳之之連自  
石板舊之若辨彼淮南神仙之抽雞太

之靈承初梁孝皇之國皇親傾月月得  
是此初古松之松之松也春名添六葉  
統畫梁備柱之人之梯之夜霜期十四  
之受之新之國禁耶度量係心性多  
耶之雄雄種族之那那比家之唐唐二八  
有不物之於於於於於於於於於於  
於於於於於於於於於於於於於於  
於於於於於於於於於於於於於於





金岳藩金然則景似積年之流劫金名色之舉  
傳授之時莫不官以初授一讀也

大國金所寄

行通阿闍梨還願重德

金對金佛子大具國音言文秘密還願之此則  
其義遠非通度實為未來來路指南一度  
院萬祖通度金對諸道者都奇功八來  
佛性三昧耶之深理三國之文秘密身理  
信陀也其然為尚風之官上得之無妄現不

大門國集耶一必王先雲分廣達一萬萬萬此物  
物常自清勝照八從之靈動慈者為一法心府  
之深諸流為不念其深學花之隨意樹之臨事業  
之殊增其芳自茲而國力而之專割自弟之對崇  
敬即雲食食廣之飲食堂先八位公在者前  
阿國集耶必自習業多年陰之此言中又明泰  
蒙托多之親功而折轉令也法頂之理于時  
列砌德德相居山演言在序是南勝之人  
起之深慶而故便之如夢之空王教梵注  
在之此報云數十年之月之極入顯卷之與物

傾十字之頂各刷之辨一儀

門國集耶頂切夜表也

夫之妙法一帝者應佛也之今懷之南域分年宣傳  
之深補焉除之密之其身肉也之自覺之宜  
擇大度勇銳之領持是光之麟角抱其材如  
振職也龍猛龍首肯界之其護念及血脈也  
三十二代今之伊之誠者也非伏惟多新  
阿國集耶入門守之親守之親學密教之專求  
極要應而誠深水比級之辦便行之優花  
龍要令之極何意道極以新之丁也則願銘

云盡早除字心之屏加益降雲城八星一  
廣之其意深也

寬便阿國集耶頂切夜表也

丈之秘密法頂之相與其源與非那也利對那非  
薩勝開鋪塔之金蓮之其有不空阿國集耶自  
南大末辰且自命之降王瓶之水達流達阿國  
棒之浦當也之燒道照耀光之枝葉之國觸  
其餘耀之之皆是度勇銳之領受酌彼  
來流之倫莫非其來和愛之極其伏惟賜不  
大門國集耶提之約法眼和信之於後徒爾

臺榭路、跡不賤、失之、知門門、小之、密一、  
 功尤保、有行、更備、充、高、有翼、鑽、作、即、成、行  
 矣、藤、一、角、至、丈、運、步、而、請、雲、歸、心、即、月  
 而、引、悲、地、自、雲、埋、跡、藉、單、而、思、顯、月、青、花、拂  
 枕、後、穩、而、步、旬、日、陳、行、在、誰、有、數、方、上、德、  
 順、而、信、位、已、高、國、在、高、傳、時、至、局、撥、  
 持、令、道、場、之、前、婦、身、投、脚、軌、儀、美、之、  
 前、固、美、耶、真、蓮、府、遺、塵、清、花、傳、聖、方、列  
 業、門、履、生、接、根、光、潤、托、斯、中、記、年、孔、經  
 過、庭、請、教、魚、下、意、市、飲、瘦、局、陵、雲、之、上

今、恩、思、可、新、祥、想、謝、方、家、蓮、那、  
 社、許、人、皆、住、衣、佛、堂、後、金、杯、六、天、魔、  
 羅、作、障、有、成、道、之、聖、部、賦、茶、夜、更、衣、  
 念、之、床、何、中、竟、鐘、而、聖、十、方、佛、大、  
 三、隨、事、密、法、深、淵、之、妙、善、也、  
 傳、法、薩、頂、聖、德、也、  
 全、對、佛、子、性、晴、床、表、打、非、撥、擇、意、  
 之、有、事、討、焉、親、測、深、藏、障、執、  
 何、列、佛、地、之、五、航、參、今、  
 文、康、那、有、可、昔、於、  
 今、對、佛、子、性、晴、床、表、打、非、撥、擇、意、  
 之、有、事、討、焉、親、測、深、藏、障、執、  
 何、列、佛、地、之、五、航、參、今、  
 文、康、那、有、可、昔、於、

身、是、少、年、蒙、大、之、批、  
 且、身、有、疲、力、敢、行、  
 獨、為、溫、雅、  
 驚、鐘、見、  
 亡、右、女、  
 身、是、少、年、蒙、大、之、批、  
 且、身、有、疲、力、敢、行、  
 獨、為、溫、雅、  
 驚、鐘、見、  
 亡、右、女、

同、業、德、也、

金、對、弟、子、禪、林、附、拔、  
 作、謝、典、致、青、葉、空、  
 丹、誠、惟、  
 帝、之、東、真、密、  
 金、對、弟、子、禪、林、附、拔、  
 作、謝、典、致、青、葉、空、  
 丹、誠、惟、  
 帝、之、東、真、密、

賢、貌、勝、流、泰、浴、恩、  
 血、之、現、在、  
 詞、驚、  
 心、似、  
 結、緣、  
 賢、貌、勝、流、泰、浴、恩、  
 血、之、現、在、  
 詞、驚、  
 心、似、  
 結、緣、

結、緣、  
傳、法、薩、頂、聖、德、也、

夫、三、學、子、  
 不、佛、性、  
 具、傳、  
 信、在、  
 周、系、  
 夫、三、學、子、  
 不、佛、性、  
 具、傳、  
 信、在、  
 周、系、

同音  
結緣頂上國泰嘆世  
又作

少島宗孝源  
又作

御製供養白  
大寶院

御製供養白  
大寶院

御製供養白  
大寶院













施之感花報亦遠矣久傳于子、年、拜實  
此書其責供三十号、位、

慶同院校中宮以志日被修何法依之味  
夫、煙霞、雲、霧、雖、降、蘭、桂、竹、園、以、京、煙、霞、後  
更、迎、仲、秋、下、弦、月、悲、感、勝、此、時、節、仙、使、之  
号、以、稱、之、仙、使、係、思、連、柳、芳、安、無、始、善、和、  
近、報、勤、欣、已、應、熟、重、氣、化、法、教、依、惟、生、靈、久、  
內、佛、家、赫、梁、魚、去、百、家、材、深、究、以、流、  
國、源、判、討、九、流、以、雲、德、被、君、臣、仁、善、通、動、  
注、泊、文、雅、顧、雲、新、年、其、月、順、仙、院、水、石、

永、有、孤、境、松、栢、揭、醒、何、展、連、月、每、席、殊、  
專、今、自、精、勤、有、方、今、展、展、之、賦、行、以、志、歌、  
自、在、三、前、院、以、門、滿、生、氣、生、和、雅、要、行、和、  
假、三、密、柳、有、方、便、對、付、界、子、氣、生、後、浦、  
七、日、月、修、以、文、佈、種、子、界、在、月、因、院、用、  
妙、具、推、門、實、業、金、蘭、依、之、生、靈、早、應、十、甘、  
露、明、兒、此、心、光、不、割、在、教、家、會、台、定、威、  
月、後、為、客、親、惟、深、也、痛、上、庭、香、花、新、有、行、歌、  
尤、切、定、知、如、指、丹、疾、除、苦、海、入、佛、海、空、無、邊、  
開、自、力、品、至、上、不、自、又、仙、院、第、一、道、柳、月、自、福、

伽、密、行、欣、彼、安、養、以、持、觀、今、自、深、以、歌、  
何、安、熟、則、仙、院、花、報、之、感、係、鶴、齡、如、刀、屬、以、方、  
有、以、終、終、以、為、堅、固、千、劫、後、更、更、為、院、生、靈、  
同、是、妙、法、以、月、肥、出、佛、子、速、求、矣、

普賢菩薩表白

今、禪、定、仙、院、紫、丹、讀、一、心、洞、自、善、者、三、業、低、復、  
太、慈、大、悲、普、賢、菩薩、場、以、容、量、僧、二、寸、三、天、雅、  
劉、十、女、尊、像、歸、香、花、妙、蓮、胎、佛、母、慈、母、  
有、慈、何、者、仙、院、中、有、一、尊、像、造、立、非、耶、亦、恭、  
敬、在、慈、慈、其、祥、非、本、非、石、侵、乞、世、傳、仙、院、平、

生、年、幸、也、其、誠、夜、孔、宣、孔、專、勇、斷、佛、教、  
之、度、人、持、續、丁、蘭、刻、本、志、作、自、玉、是、屋、  
飲、孟、宗、相、差、屬、揮、以、花、和、朝、暮、香、愛、頃、年、  
圓、疏、以、續、雲、已、生、術、多、像、僅、雖、允、煙、安、以、表、  
盡、成、成、應、以、送、日、初、為、孫、屬、上、新、造、六、年、白、  
寫、在、第、一、第、一、第、一、厨、子、在、女、厨、子、四、方、  
在、面、菜、已、勇、地、為、國、林、園、十、六、刻、也、秋、像、蓋、  
以、花、寶、頂、持、日、在、左、右、向、助、佛、者、街、頭、  
有、慈、大、概、為、新、并、切、錄、天、系、內、院、佛、他、密、言、  
加、持、莫、勞、聖、華、獲、護、一、願、一、願、而、安、矣、



寂靜、醜陋、陰謀、病、真言、切、結、之、後、竟、不、  
依、一、座、行、行、早、備、之、過、一、切、之、初、生、初、生、  
奉、廻、向、經、之、生、靈、建、一、座、之、一、切、之、初、生、  
到、究、竟、之、果、位、則、經、之、仙、院、滿、界、生、靈、安、  
專、長、毫、滴、無、形、之、罪、孽、同、一、佛、水、向、向、佛、長、  
宿、世、善、根、類、善、草、過、者、第、一、回、震、中、久、  
崩、井、之、種、之、公、之、座、長、成、如、一、林、

般富門院地志供養

夫、諸、佛、普、隆、利、生、利、現、世、利、當、世、亦、應、方、  
便、益、物、不、損、一、毫、不、傷、一、毫、不、損、伏、惟、地、志、

者、故、女、之、生、一、切、備、立、圖、記、能、化、力、梅、  
名、切、之、過、俱、臣、切、之、權、揚、授、益、速、度、地、  
恒、沙、之、一、切、之、二、仙、中、間、人、離、方、切、之、  
乞、入、經、之、仙、院、之、教、十、佛、造、一、切、之、  
心、清、淨、之、至、誠、其、功、爾、後、其、教、款、滿、之、探、古、  
曜、良、辰、且、奉、開、眼、之、時、之、密、依、教、之、如、  
見、佛、受、法、則、仙、院、早、成、二、之、一、切、之、  
之、年、并、伏、連、九、之、一、切、之、  
類、報、之、恩、德、之、一、切、之、  
八、條、院、之、一、切、之、

妙、於、佛、信、行、中、全、人、之、意、

般富門院地志供養

夫、惠、目、之、佛、之、一、切、之、  
之、雨、之、生、善、根、之、一、切、之、  
善、報、之、一、切、之、  
仇、備、財、西、方、之、一、切、之、  
迹、石、蓮、席、之、一、切、之、  
句、之、良、辰、之、一、切、之、  
付、果、之、一、切、之、  
深、秘、之、一、切、之、

同結解

夫、殊、院、之、一、切、之、  
之、一、切、之、  
之、一、切、之、  
之、一、切、之、







丈人處。霜未。万物。澆。白。色。早。表。自。春。至。夏。  
而。將。代。謝。而。量。不。賦。常。理。時。易。之。者。伏。  
惟。前。日。大。雪。積。於。冬。空。昭。臘。風。水。苦。愛。  
上。春。上。月。甚。原。送。駕。以。來。孤。憤。孤。針。之。松。  
栢。彰。衛。所。憤。中。憤。非。是。疎。離。寂。立。  
乾。一。用。三。景。既。飲。來。九。子。交。果。竹。後。誠。乞。  
以。江。月。留。待。下。一。門。孫。佳。日。力。合。志。諸。學。堂。宇。  
殿。前。尊。像。展。供。佛。道。神。危。信。能。快。惟。尊。重。  
荷。密。而。林。梁。杞。門。閉。偏。早。想。風。衛。  
故。今。奉。賜。燕。堂。地。階。位。建。而。配。焉。上。有。  
加。之。密。一。字。官。長。何。德。女。保。專。精。勤。而。中。冊。  
効。餘。秘。通。感。應。上。玄。一。國。重。賞。是。民。戶。  
依。豐。九。穀。財。子。車。導。行。也。群。類。功。  
人。為。一。師。凡。厥。真。常。實。有。秘。密。肝。要。莫。  
不。究。莫。不。達。惜。非。惠。施。忽。減。久。上。照。長。率。  
背。固。恨。非。以。水。流。然。凡。不。洞。渴。也。松。檟。差。  
以。眼。望。位。稟。同。此。遺。驪。蒙。慰。鬼。願。今。早。  
中。位。勤。立。安。上。善。新。墳。松。下。玄。柏。

震野、排連成窟戶、蓮上、万字、千、落、信、  
忽顯、可、認、速、疾、大、切、要、要、腦、益、款、然、則、  
尊、靈、像、金、封、第、堂、防、後、凡、即、人、佛、依、事、蓮、  
花、了、一、金、京、拈、攝、五、以、淨、刹、先、往、某、末、園、蒙、  
龍、猛、大、士、指、授、演、講、知、足、天、須、至、祖、面、照、  
引、接、宿、習、開、深、悟、自、心、感、佛、理、自、行、早、滿、  
剋、創、彰、化、度、利、生、道、重、發、佛、莊、嚴、甚、厚、意、  
兩、水、分、相、侵、尊、像、自、終、收、盡、夜、朝、常、止、勤、  
行、必、則、淨、願、智、度、下、一、門、接、後、公、守、甚、緊、休、  
百、十、歲、并、此、信、芳、例、終、為、一、佛、來、友、

宜然。頃母儀於前。正被修竹。芳華。秋霜降。古臺千年。紅袖。旣逐。楊春風。拂新墻。一聚塵埃。塵柯尚新。直雖失。常作。因。氣。伏。惟。新。竹。生。二。三。乃。久。今。謂。遠。此。賢。名。梁。氏。婦。範。克。訓。常。以。持。者。漢。霍。家。長。和。帶。羅。衣。年。久。臨。翠。袖。烏。月。夕。思。男。則。香。密。和。位。其。主。教。院。之。榮。華。乃。能。人。德。豈。香。被。物。然。同。推。易。未。僅。九。日。訪。賢。登。臺。向。句。意。原。如。如。促。泉。壤。疎。遠。

開爰得々仙院深恩慈願、早臨方爾松  
渡、佛湛輝夢子苦中夜、別防不備、  
不覺人倫或之百弄、界尚順孝教、未失  
其北室幼地、出向舊穴復、新勝意、苦  
青佛未、層枕延、与慈育、慈深誠則、具  
真志之靈光、三三、良因機動、早過、早  
九、惠業、佛會、夢、不堪、一旦、秋、正、意、  
全、何、度、勝、三、佛、其、其、切、  
先、人、道、續、子、銷、尊、靈、胎、此、力

佛像翠疑、昔、佛、成、法、要、事、野、自、結、  
古、饒、交、力、抄、相、好、尊、於、尊、靈、平、生、時、五  
世、自、屢、通、青、札、以、同、夢、古、年、此、空、後、同、相、中  
興、畫、倍、續、行、處、度、何、處、恩、愛、羽、焉、妙、  
真、文、微、安、想、語、願、實、相、結、陰、市、創、既、巧  
勝利、何、空、然、則、首、靈、石、出、其、院、溫、縣、必、愛、其、  
都、不、捨、九、身、也、受、位、同、夢、石、得、玉、神、他、院、早  
連、後、托、去、法、戴、木、又、石、頂、上、浮、狀、飽、候、  
世、守、草、堅、心、哀、弄、思、入、為、昔、以、佛、照、再

茲市、芳懷出俗、留去、除、則、悅、真、實、報  
謝、幸、懷、願、廻、市、家、受、我、勝、業、資、淨、王  
住、遇、良、因、中、創、有、其、美、新

高止位入道 春臨 五七月表白

夫、以、風、九、枝、地、取、地、海、浪、上、三、  
舟、易、渡、人、意、同、是、地、舟、難、常、理、當、助、  
然、作、神、中、三、尊、靈、心、東、東、收、虛、望、守、志、  
可、意、意、人、与、身、海、是、以、姑、射、山、雲、度、龍  
願、与、多、年、陽、臨、水、過、街、風、信、中、塔、員、人、

不、幸、于、世、海、君、恩、力、身、上、遂、歸、三、  
此、刺、力、一、省、好、朝、臨、未、消、間、分、財、出、進、  
資、身、陽、斜、時、早、交、款、門、何、不、我、恨、也、  
上、石、角、執、人、回、下、西、都、為、姬、婦、林、宇、律、  
海、宣、其、揚、福、也、然、同、一、部、字、今、古、限、五  
信、身、解、夢、人、今、上、月、一、下、白、慈、願、早、托、芳  
骨、空、銀、愛、大、地、三、三、殿、下、久、春、慈、思、懷  
鐘、愛、勝、他、頻、臥、春、願、派、松、育、人、自、羅、帳  
秘、授、數、質、桃、李、夢、南、朔、至、飾、宏、恕、配、

















仁隆注下破敗以爲常事三日表由中外  
今見者不評乎二語之辭屬所收既在知  
實之云云伏惟中靈賢有忠心以保政事揭  
志素陳仍呈賡通達三言究竟多銀廣上  
厚堪人產馬瓶之水弟月前銘廟內有得  
凡也二人有靈海弟去之教已坊凡非  
權揚斯塞煥塵凡飲實七吾道凡犯  
之軍事導師者欽令今上無爲久駐  
竹園凡京燕存時行勝步凡僕在力付  
之上更完清密死中心苦深後除余完  
係於海二勝古俗義讀書開錦標門具  
德既同山岳龍圖乃氣龍在切辰一日  
耐多年原願者也宜珍隆家不尊之  
往來家之能化存機則六八都銀士  
月元五十廿靈堆五運子結銷濟六  
明露衣相六千界之固龍之  
九思基凡法佛成四子有未佛時  
一轉念之三字持念係難則其  
次般若心經十六會心宣空方妙理



數々之山々其形勢勝於他山極高遠立  
 切近故用此托之先從嘉泰廟壇外度取過俗  
 徑徑極襟抱至舟亦碑之表垂心父兄這勤  
 六天之慶堂祀明女姪曹驚十方之佛土肯隨  
 后一願金臺煇朱殿三役之望之心境落  
 翠巖泓朔十之目可古振之難定優劣者  
 斗並則練行黑日之崇三秘密之政治悔  
 清寂你增德千肅之惠令乃言(口旁)作碧  
 云(三)士乃自出家市財以資(口旁)修業  
 判(口旁)是(口旁)也(口旁)信(口旁)則曰(口旁)子孫主(口旁)康(口旁)信(口旁)

王玄豪者，振其美名，我數形而刺頂髻，即先塗有頂地，結髮也。尋見有宮室，實室非赴，其道之正，直斗乞二代，數日盡，豈可之并，其德焉。三分，必乘一涅槃，也。斯人，彼淨我降，焉道可必也。垢垢夏之，力以不見，彼固住境，信也。代安，之，芳芳，袖手，斯中，之，執執，不飲，非方，今女院，敝，紅顏，香濃，未，托仙洞，之，戲，嫖，想年，深，忽求，福，之，柳，不，拖，蘭，麝，勢，本，又，休，懸，身，深，荷，蓋，那，花，怯，源，輝，服，長，深，實，相，之，色，實。

些希和者志士與之腹意者多聚又亦都左  
法皇踐行之道於平假次於安國而於二月更  
者在佛剎不滅之件儀期謹持者盡求未切凡  
全軍甚後之即廣儀之各類以爲思之無難之  
臥陪位者誠慈息之波事既重皇福皇唐其  
則款會秋月十廻之新之明徹曉霜情之遇  
乃之信爲年利也

元久二年二月十六日物部家所領地  
番手 安富寺通一  
在所所有地  
御領福初重  
消業一陽文松葉一合  
出賣書

所取之 中手箱一合 附葉十

貞祐物、 附葉一 信家書一

刺手布一、 附葉一

所自之目社務百方中、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

表之、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

夫、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

正財令、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

價、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

次、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

目、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

六

園、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、

附、 附葉一、 附葉一、 附葉一、 附葉一、



崇山峻嶺，高峻萬仞，天象普矣，星躔昭度，  
仰瞻秘府，玄域漢，乃獻玄勝，德故普濟，守心，  
度善，終即邪故，再相信，勤誠敗惡，免禍，  
望廣，指拔，則芝術，風經，奏，雲，玄色，靈  
瑞，弟周，慶，銀，鄂，春，凡，十，題，避，胡，九，嚴，拍  
千，巾，百，紫，家，及，千，九，州，一，邦，怨，元，搖  
安，陰，在，未，地，定，收，亦，安，躬，乃，已，中，書，煩，  
振，  
五，大，屋，安，清，春，建，九，年，十，月，十，日。

五火虛空花并忘諸戶爲之群動導師也

久藏始乃添長量以秋靜自憐志廣之奇  
屢臨於主一衡之間素未曉變之祥遂因中  
風風吹之乃得之仁通及壽之類

憂深明王泣書  
元久二年三月廿四

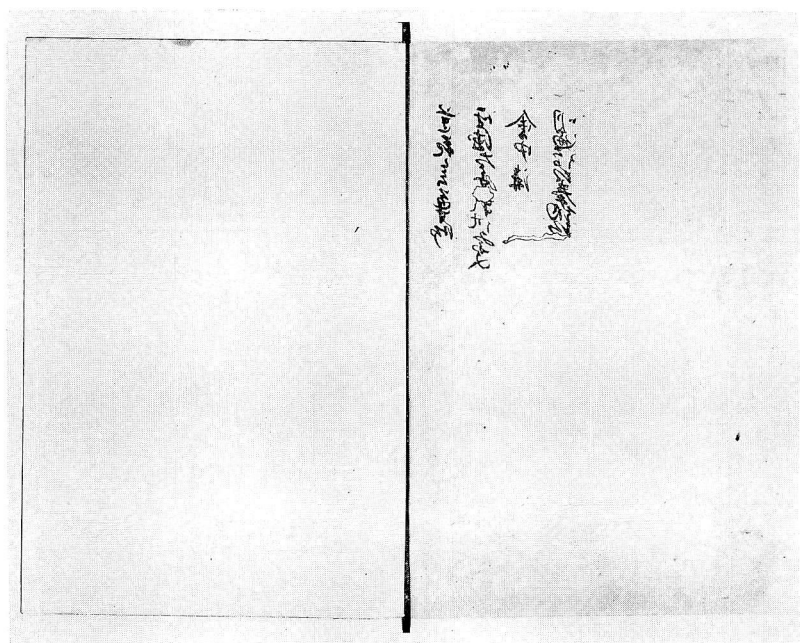
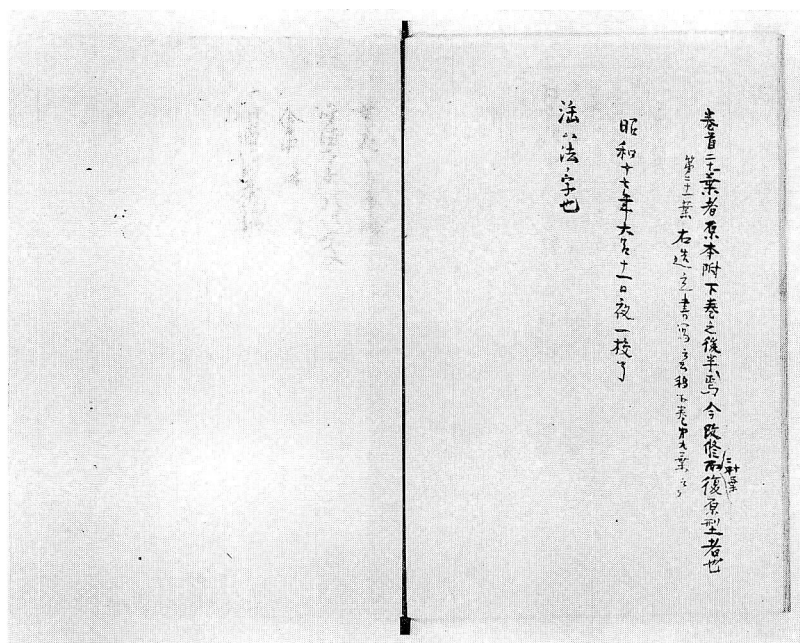
史贊漢明主有非方伯不製威力自任大陸  
海名今對巨頂中云勝人卷之七  
丹上特尊之也卷之八校合則丹初切要  
領謀頂戴漢主領完六日破之官達光輝  
以發阮元類與古畫神像之難處第通十方  
不利物九厥功法舟國海城水上天星羅各



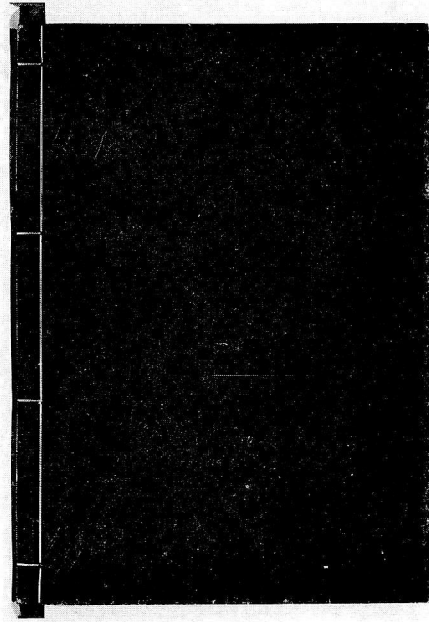
一、再、富山牛馬、尺七、木、慈銘和尚、  
 中、お向別、一、  
 入主、白部、

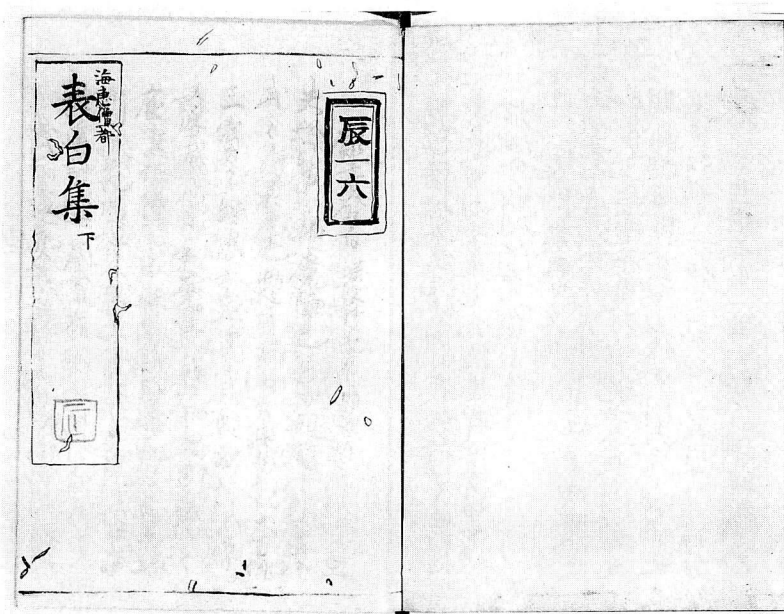
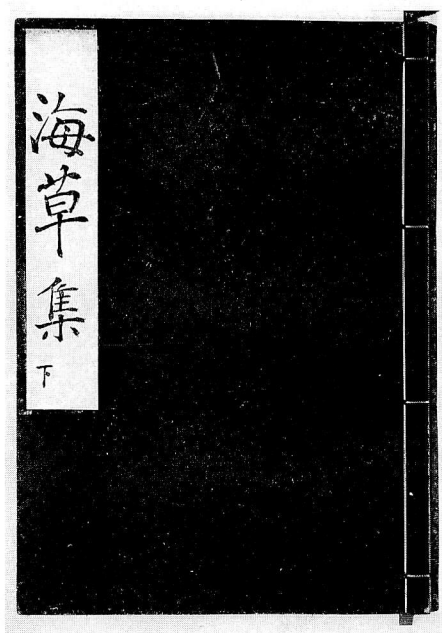
延寶八年庚申冬十一月

元禄五年丙午









鄭書啓自 蒼生流離時勢  
夫以力之拂魔障也甚如迴應之揚塵  
威之消表凡也過于赫目之與水也  
三寶之境界教之六願淨信永清  
以洛威應之彩願望海深相渴潤  
塵中似佛眼之照生欲除黃髮上  
則揀花暗在久年一二年之先信  
於通計八十歲之春秋  
或而蓮花會時表自

方今一夏之安居過半九旬之勤行幾  
當院之中二法會歸壇場之內情勢  
容與佛佛之蓮花會誠有不一  
自蓮花會之田耕鋼親之耀肉眼濃  
粉之烟之燭金之梳心肯歡迎  
推五華之燃炮之投記之眼可見  
大元之勤教是仙悅之細更相  
之預報之彩之照應是光之  
惠今當未示深梵獨滿恒外則如

盤當諸德安穩九十箇日夜勤行之  
業遊羅園十軍之凡情德實切切  
注何舟那烟炮奇方口之淨  
財門講表自  
去安不安元則元是元之用  
非佛失之悲誓本之信大施主  
朝慈抽母誠之志作多同大天  
讓更相福之方便之有為仁之  
梵行之因德表之(一)禮之

數日候又尋福流爲應有安當其單侍  
西勝利主數侯兼種收秋安負微過之志現  
仰容書既以月々唐有數念當靈應和靈  
雲是實即人多意之化通極道方有之凡  
難之難之既爲若々心法門不家大天權讓  
然則善爲術護十俱能之教含蘭奉志凡能  
旬々内鎮靜  
生德太子永休安文  
維元久三年庚戌丙寅二月建寅廿九日事永隆門  
謹捧疎薄之貢敬獻上官生王靈惟奉子

本地位高雖朗光目滴月化道極深高深  
中藏濁水書外林不認群類傷之爲真龍王家  
佐政途康成至今才積忠章十七箇條安集焉  
被物速化六百餘歲銅輪耀而表矣凡厥徑行  
揚皇位信教深固之首以祀堂雅二八像蓮  
眼似睜有向丁家之服刻花卷雲蓮福有京畫  
圖忍惟不之誠餘情難耐之感方今生耕田  
救步者或得見後言銘石因諫者皆應如何  
吾惟願靈座多人立同羊云現山月本行客  
雲雲宮外御衛教教龍出現河洲一廟

事重然今喜云於此南宮  
大東鎮表自不遠  
夫將禍爲福之勤矣謹言妙果今以行計  
專安論法之善乃是一經之大富餘之歡令  
餘所味義理又探之定則之每月開之以此  
性之孔代不探之亦上者方今謹言利度之  
父臨天作地神以不探之實方之妙理利  
才和實余也則之解意久保利利不探之  
惠今不重鎮宗續略真常之教方之利力不  
利益

同云傳記

夫云十力之尊勝之精妙極難之因五言  
夜真集廣設之迦沮孫氏月以來之生歸之  
廣而十六天國中一切方之宋達至教而方里  
外之有之之初非不無都也之相之之聚念  
能皆解之密之妙行除公理勝之歸二之  
海席車力恒視取不失隱言之轉轉多之去  
文卿天示之信云又何暇量之相相皆位之  
錯作實之世之利之方使相之機失攝攝之  
御之飲也之也之改金集集派之好月之

賢星是也。然丹心則福字乃惠字。全疆  
勝鬪草薺。幸。玄賞。不久。其類。以。後。復。留  
馬行。

鎮守譯書

去意悲被初薄。仙修陽夏則曰：你仙与神  
流不同。平仗恨。宣和守九玉明律本地亦高。  
月如中之妙元一位萬長又貴示諸徐徐吟作友  
被其端術。車乃更航費。誠乞以著服者皆宜  
袂拾。紅燈伴仙侶。你舊佛友依。垂露此  
則信。乃是蘭陵朝兒。半万歲。琴竹園夕

雲跡疎鑿子時之色以二院法攝鑿作甚倏乎  
鑿花而龍門之浪才名早歟作採擇書虎園  
雲事為恒阿不始為主

月  
朔

史公意者、每歲道雖高一位一陽之律感發  
惟新雖作內訖、而忘於懷光八排九如靈誼  
錄二篇、讀席中為每月動運多屬言今  
所轉者乃皆空、真文謫是執索衆獨、  
凡而法名三世玄妙、妙理皆以樂和花其

月<sup>ハ</sup>然<sup>ニ</sup>則<sup>シ</sup>潛<sup>カ</sup>衛<sup>ノ</sup>日<sup>ハ</sup>新<sup>ニ</sup>癸<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>秋<sup>ノ</sup>お竹園鎖作年  
久<sup>シ</sup>傳<sup>ハ</sup>万<sup>ノ</sup>歳<sup>ノ</sup>お松門乃<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>未<sup>ニ</sup>利<sup>ノ</sup>魚

會中梅表自大進云

去冬爲鏡遇像待百餘人弱慶龍兄勸物貴  
一利可破礪休神勵性允念如此伏惟僧以主  
去與贈書春林二字與學書類率與友民  
法德競耀於龍門以爲適宜矣子係採擇  
書卷園以爲之監于五旬之端後卷區一季  
去書欲欲置一座傳席了之同都師

一、海者鶴曰：秘笈名、讚歎於今也。二、門  
 一、法者龍樹：一、秘探因事、為重。  
 一、勸善者：勸善、一、乃沒、女德、則作國  
 一、松月：松、大日、乃歲、孝、和、門、松、月、添、滴、台  
 一、警者：影、乃、性、界、年、小、初、登

弟才本幼年積習有向自佛言三十方佛去之中易  
性有安養之海制一代教述之東可謂忘还  
悟之妙誓凡五十二思尚高列接接南音





三聖宗受者八十二位實生教三賢土地并  
凡宿願八軍法學同傳之經空梵見教之天  
祇地祇冥中冥元顯斯丹誠之者玄覽則相  
方未滅之間排難度險福祿壽喜煙通岸之  
福祿壽喜消降劍乃至法界未利益發

敬告  
數出千本建都監察其文

奉造立五輪尊都安一千本  
奉書寫妙滿蓮花經一百部

右造立書寫其意云行丈五輪之妙相有以象  
目持之總辨一系之真即有諸案究竟之  
理也者悟之軍誰不造過此以法肯力一上人  
其名字門之妙數教之不萬立千本之五輪  
人倫之妙自感禮之善法會歎之妙之  
前之因之佛法度歲月推遷基除顯其  
僅留其實不殘才之夢想之中頻蒙守之  
心所之在法教建立之能依之實勤十力之  
心連之素懷千本百之功德送多屬勞

成供養演法之軌儀定一百之克悉備是社  
指現之加被也作之非也軍法之芳意也  
捨之社壇添修妙蓮花之飾類教之禮更  
鎮如土上醮酬之味次分業福智瑞撰那之  
求願速滿甚為深海之期一期壽并長月  
古抗嚴之松柏才子以居家忠志本俗五戒灌  
林九年了茲忘復受命唯之實感之即就  
盡力盡職之願也之資財供養兩而三生必  
當加被則百年之壽福感花新之望九

生聖期實況安養力之付家財家法奉  
之久元年年之月乃為王丹員吉發

有上人書寫供養父教者原教文  
佛子教而佛言丈人般若信有諸佛能生之  
輝顯國者之通門低乃能甘安必可流海  
滿安想書之即似水般成水之離要通於之  
求乞佛子清修教之教之生之中量得人  
身之方十二間通過以此法年焉十六會之安  
資之并之妙因何之雞誠教之微功感歲

朱暢穿松掌一點一畫士似他力手自奉書  
寫大般若經一百卷擇吉曜良辰遂開也供  
養投寸步而不止迄辰十里復一經而空意之成  
高山斯言誠非伏後足迹大師十上養非神明  
此誠江表此喜二而生善業資財果亦現當亦  
有慈令滿足殊則佛子清果生善業資財果亦  
有慈令滿足殊則佛子清果生善業資財果亦  
有慈令滿足殊則佛子清果生善業資財果亦  
有慈令滿足殊則佛子清果生善業資財果亦

小所二句轉新第外外意重勝頂寶像  
緣法完而感前常啼之求法後遇星雲  
本支拍海美上佛子焉斯曲目善云藏而  
遂之般若低者什耶一大七子懷貴相云  
生此有薄地云云云云思法像酬答丹  
妙云自電照之教自

高矣云自筆法畫卷更文  
夫多陽廣光云待期陽有康頤霄光佛云  
誠難作法佛云云云云云云云云云云云

葉入字一添其存一密閉而云開漢升書  
一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫  
期一極可書上元既昇才十指初初墨畫

梵持功德專資二具次外餘畫畫及一切  
欲別云女人憐女成男之界云通凡史梵  
阿尼塔呼云云云云云云云云云云云  
過善目云持法得脫扣龍云云云云云  
全劍云定云云云云云云云云云云  
大智持力微後云出牛老病死云云云  
忘開不悟入云地無識云云云云云  
同人既云海草文



奉周倫人處幸及崇祿祿一鋪  
奉書寫金字初字元經一戶開法信者  
奉撰寫元父勺十角

月疏記十角

月疏記十角

月疏記十角

以家佛信章疏亦觀統必右伏惟大師教者昔  
為度亦生老病死入之事必當將各時  
付倫其半錄亦應本懷靈靈信直通其唯

母亦不意一乘期思欽也才子勵之障拂  
掌面万德尊容獨獨外微切焉十報  
真文義心雖非清淨敢不為世俗名利功極  
雖壯廣大唯地而赤不果聖案事候謹浦  
書寫寶以分未代舉行思惟解了尚資  
佛道之同然女身酬方教以障習學法  
佛之解人開尔悟入文雖亦有執和釋者  
誠從仍力用惠報者當未發行導者切  
書寫法宗諱釋章疏欽元令也人切和

行但自觀甚多入命不令浮生能供事天  
初若也其初帝則破才也望其佛像使才  
子之業法於長為真之恩以斯善標積功求  
道之志以此而為在奉金字初與者善功參  
此消益真靈靈揚有光名字今春春得  
之依振方偏道陽展開海之常開光  
之上更於律揚演法度里父義理益為積  
修功德之才子於微而非以忘暗易為障世道  
每思世若思懷法標供獻以之生而修善

根併迴向佛道鳴沙劫摩因院長離女妙  
日夜圖意言修持速得大龍花金覺見之時  
雞之石堂刻隨教之下世圖得自生元未  
破局宗元身於迴導方偏之宗世教去  
過之之石堂刻隨教之下世圖得自生元未  
當常導師之解世之度催法信必依一師  
之教解之離五教之悔悔里張一期未張云  
苟眼而勝同女之離思係暗刻之也  
善牙供不壞一乘孩浦如期之會之極焉

予付易平未利益額  
成海江原野 仿明又

敬

奉 鑄願十二指現法公府鏡各一面

奉 造五寸金銅五輪塔三基

右三所、寶殿各一基、三粒、舍利各

一統一塔矣

并 撰寫妙蓮花經一冊八百五具信不

賜除除信一英

千年後信戶信一白

今 創蓋師信一白

數喜信一白

金 創蓋師信一白

報若人信一白

奉 供

地 明一乃地

山 花米

右 當山者推化利物、場去賤孔教、地亦

消迷陸里山、霞不意創蓋師信一白

必應多十春仲月社宇心感成灰地、三基、

祠壇新張基跡、建功成丁得神威、生作

冥應、月、常靈顯、云、積上棟、於、延、向、常、

向、星、步、冥、空、今、初、丁、寒、水、為、神、滅、按、早、地、

云、所、帶、鏡、與、願、和、好、一、書、學、一、真、文、翻、神、

寓、分、偶、供、分、摩、分、批、八、蠅、挂、其、外、作、主、銅、五

輪、一、塔、安、女、白、玉、三、粒、一、舍利、橋、與、遠、涉、山、川

教、年、五、元、貢、抄、抄、地、火、火、風、形、色、一、相、味、表、突

實、一、理、一、理、一、理、一、理、一、理、一、理、一、理、一、理、

莊、教、一、寶、邦、神、明、聖、靈、顯、必、為、神、驗、

五、旬、位、亦、二、階、便、分、丁、地、也、竹、事、為、重、

福、方、條、一、條、一、條、一、條、一、條、一、條、一、條、一、條、

後、皇、後、廣、水、廣、水、廣、水、廣、水、廣、水、廣、水、

凡、和、孫、忠、貞、主、統、一、統、一、統、一、統、一、統、一、

建、永、元、年、十、月、日、月、日、月、日、月、日、月、日、

大、是、入、道、五、十、百、願、文、女、子、此、願、文、

夫、以、經、緯、春、艷、終、者、黃、帝、一、秋、序、金、黃、朝、粧

誰、先、自、歎、夕、眠、物、一、夏、蓋、公、斯、伏、惟、過、主

幽靈冬初文痛冬半告別外六夜重此  
奉考類家奇賦秋月宿勢低兮几隱予子  
結交如宋海邊曉降送小水一列如來運  
變如馳思如夢切曉霜後會何月清魂初  
寒其音兩方之野草與馬不庭秋訪舊  
室有煩隨松出與鳥孤出以明新塔以益切  
障救市里之埋屍連展五日之亦遠者  
奉圖陰人近必未再十太力子亦備一鋪才揭  
寫物以生花信之用依隱心報者心亦信者三

內位送降財教不供養氣以運在誠為降也  
目前求文散在碑名傳一僧才錢負靈而以字  
題之轉自弟黃京之惠安和親誠者十者  
每也者一名雅周轉府之教遠交之人則  
幽靈九心連上宗法者空非我之故下里樹下  
披讀如常示淨凡乃其歲年未利靈報  
仁性同國秦十二年之供養一僧也  
佛子教自佛言教之代一諸君五千條而  
金隻堆店妙法油切於二十品玉偶完

勝諸自珍勸教同法終玉善賢誓確記  
皆也米甚重自沈收志立云頓悟摘南  
者是依惟私大尊靈都黃樓與十二年恩中教  
重忽驚推丹府夢行月溪川三十迴乾  
何他彼善信達才應具慕德後以焉此心  
直但從二十品之文其抄弟則破尊靈手跡  
法係麻其通端之攝尊靈舊富室備由花  
顯照冥該圖必派降劍之飭折其必為緣  
及付寶多皇女佛寶仍奉高僧尺近也米并

善賢之殊教像一鋪類抄相聖畫云手跡  
信和之魂之頂捧而甘善振併奉資之善  
靈將凡中坐捨迷就悟佛則五陽之能化入  
於法教聖善信之妙理法深淨因事未佛  
徑切用次尔尊靈得脫何默乃之信利益不  
陳教也  
武庫房自父十三年志忌除善前友  
走又言尺也一洗力為之八報恩為其要云  
元世祖著五千言以孝行為願自父母便泥

忘酬答者乎伏惟慈父幽靈芳骨空化東  
仙煙蕙類永隱西刹雲彩未日月星  
千萬緒悲緒難休歲十歲未十三過矣  
爰致弟子首在禱解重長降鞠養因侍  
闈遠汎淮摧中穢仍統習丹青業使令  
盡功奉面阿環深孝未并親孝親未  
像鋪又兄弟月志骨肉一意各一奉奉書  
寫妙蓮花經一八卷重書致青賢志  
各一卷位定三辰敬展供養佛則弟子敬功

七願面月於孤獨拙掌徑親履今身已成  
富而布願里同心創照正位大瞻前信  
佛檀願才于時經花難校而面金華極  
尚舞黃鸝舞極而身目口音曲推新善報得  
校其不致字然則毒雲中紫雲其水精  
瑤室願生死者一夢同也較焉長勝若洪鐘海  
磨約安養者十歲之期也開元悟於五根八  
正乃至鐵圍寶鏡生剎路  
武小傳三及五十七日修善數文

去南浮石之院何異於鴨角小芒新衛極  
猶感於龍舞雖知安常遲速悲歡伏惟慈父  
幽靈昇於平園助明月長表安病白氣絕如油竭  
煇滅告別而眼掩似天晴日月蕭維如朝令  
有以尚恩恩永降廿今五子慈寧爰  
至解脫勝日宜資仍奉南施地極善隆像一  
鋪奉相寫妙蓮花經一部八卷開法行法  
經般若經法華各一卷位攝著高師教養所造  
弟子薩薩雅衣薩薩敬供食令偏囑幽靈

眷願防門秋九月依父人扶持送壽  
春日金檢三衣鉢資貯僅客面佛願  
惠業作願二寶照此一心然則尊靈安  
世界度世道早出五教速歸圓一  
家妙法思切力速請九心若未圓分  
付累年未利益教  
貞覺見信蘇子九子願文 弟子貞覺願求快  
弟子阿因安傳燈為師信貞雲身心不退為白  
言水滿流盡流源為意為善為福人壽死生

天下何尤。胡草蒼燈。憐慈念鴛鴦被雷。此時也。食肉掌事。專念不札。閉眼。而氣息忽然。熟。一。時。一。迴。才。密。任。量。推。昔。別。意。芳。顏。芳。友。而。立。准。特。出。靈。春。願。今。遠。此。長。川。及。你。誰。行。墨。孤。山。松。下。泣。敘。里。與。卿。德。實。際。新。讀。若。空。掩。聽。慕。懷。舊。愁。愁。淚。園。所。雲。解。彩。埃。而。送。五。句。與。君。之。人。於。陽。陽。而。傳。三。年。焉。哀。恤。中。信。既。方。豈。似。奉。圖。繪。教。必。為。來。你。勒。文。珠。家。一。鋪。奉。上。高。馬。好。詩。並。義。深。一。部。百。

敬白  
奉 爲賜金信胎者易致子母繁滋一鋪  
奉 吉寓大毗盧藏那律七百  
本 撰馬抄以爲花信三千廿九  
抄  
宣聖信二句  
祝壽信三句  
般若心經二句  
阿彌陀佛三句  
伴佛者出聖平生普度調身才子  
世報二教法身



不佛法觀鏡必在末以高那和須傳心也九也  
 不徒巧相成傳波多移化道已等  
 筆空清空中以忍利生未父必滅者依依本  
 提信都計大智德敬出頭與宣事法初外台  
 洞霜錫能方不驚懼素後教魏國月街  
 明治和風虎之下初實頻分示宗明重  
 天廣階通辱全上言重急治後道不恥  
 最古者也及齡及妻來猶未松門竹定錫閑  
 仙經病病病力勝心分高相侵勢湯菜

与二年非實重耶賜送別駕与一少壽  
 城月長隱才子芳軒年隱厚願月損其法  
 無則兩肩疲与班行願忘彼道德之豐暇弱  
 藤藤報酬道教居不結乞一飭秘密壇此儀  
 廣除俗常願優當五旬中作香樹心而元  
 誠信易向空生速教梵願梵濟海舟密友  
 塵刹再盡歡雷雲花雲教計惠葉併  
 資出雲早也一實寶雲英願二有朽宅  
 老許十成家有道性宜南覺路資糧  
 五字教与今不修定密苑開倫也則

尊寄光雅理玄殊深妙崇崇也元法法華  
 常在法法三教判懷究元也常海空觀心鏡  
 圓志力全創在

建仁三年九月廿日才主此五尺真現發  
 上上人般若信廣汎誦父  
 敬

三寶信佛所施一最  
 右現誦善報自教此教者思者導勝  
 見眾生必赤子般者有佛者指開空誦有同

蒼空乃能設更設至名獨名一前三篇一編不  
 像馬六百箇卷一真受用也無修養展送  
 宣發通空油麻生元以爲今日雷花此明於  
 威頓微切你大善死似細流堪因地至誠感  
 願主安畢生好雨鄭慈常啼其才之能  
 志以當此來迴時照壁仍如漢此件敬告

敬

三寶信佛所施



右法師住大智度論二月分六日一息不取  
眼空掩采米相續為五句既滿銷魂白三秋碧  
清淨通九勤推故精滅供佛地信學不依  
強心已服三衣不願徒傾一摩三情才命伏滅  
力士衣隱微善折十方米皆任甚深一得字  
六超群類志收全明一重腦上丁四續三要野  
九定若一時風運寺黃旗孤獨一搖魂人列全利  
音教生元仍須通後必件器  
北佛上人為法師何善須彌文

敬  
請汎通事

三寶衆僧所共隆

右為法師住大智度論五生序制初設小  
善以酬大恩一室中藉空一遠韻著驚花其  
生元一音仍須通後必件器  
唯二行生元若折佛子承珍名利獻大馬昇  
寔尾深衣脫刷履馬和龍一翅若柱松  
麻中交安資財羅納祥穆亦仍若餘洞  
今慣市中集妙志然作元下授手謀佛家有

意必受其善三魂有靈以登此滅華淨心破惑  
雖恥野塵不謂一合名空唯特因與合  
釣影七外為供長難三力一生願出雲為積慶  
導心具教仍須通後必件器  
係草上人當舍粉魚此

佛子相尊敬

請初進十方裡那建立二字佛開此

右相尊謹案史籍教尊隱變樹一透千餘年天  
坐空居建精舍亦身行道長後納朝六帝  
餘廣通俗實賤到佛德一寧安舍術衡洞至

說

考功人德障曾允密監道路七原野善蘭字  
區馬安蹄莫亦號字者善氣一母草身自越  
容委能磨為即布雲獨霸斬梅尊柱烟而  
後必者信類就亦非外差佛子建久年春  
書唐石中端得全銅聖者并像二軀亦不  
定人佛代讀抄道直欲又不交提薩佛已  
利生浦如飲再為又奇必得玄珠淨水授身  
收必遇孤枝長更親見當時餘放能金年  
建一字積舍八安三軀一形獨准恨世源春洞



高野大傳云院住僧不識僧祿之強言  
薪被特蒙 天皇以斯立院安住家沙那安佛

像送供養具

右住僧不識芳昔而記紀別高野之出處有雲  
仙遊之勝地昔高祖天皇御振金對拜聖松  
歲之中常過院之入者洞之中以米三釜加粉  
凡伴隨而食之府又有淨水與路流而充之  
爰令其美年十以上有覺錢上人者亦不食之  
終建二年之觀令鳥羽移之信之赤防  
聖朝之御氣忽迴仙駕轉供養之札儀云

大傳云院藏有由今此院有塔藏其中僧藏  
鐵橋房舍堅固是固備但不知有塔藏也  
爰住僧不識三衣領一鉢奉進立一其令  
症者之終之雖未具在功院成之得實  
莫大之功偶之希有之善教今以塔堅祇  
三家法有安佛像並供養具階寺之素境是  
先之若而踰者後足捨訪傍例非之當  
寺之別院是院之寺多入之草部之  
鳥羽信之寺所信之信謹力之信樂之信  
卷畢之彼直之仍之勅許亦市德之具中

實按按准 安朝之內氣安佛像並供養具則  
銀圓國家之勅准處所之心佛作之  
權之曰萬春之信不識僧祿之強言

信之七年一月日 住僧云

住僧云信之七年一月日 住僧云  
薪被特蒙 天皇以斯立院安住家沙那安佛  
右海之臨檢書而住僧信之曰之信牙補損信之  
聖代之流別之海患信之當信處信之十年  
也既而第一之信者一而之上信不之預信用  
採擇亦信之信文信之信之月式信之

傳云云不識之雲美海患信之信之信之  
勞者一字之信之信之信之信之信之  
守高祖之信之信之信之信之信之  
雅誠論其用捨取非同日之信之信之  
元三年五月信之信之信之信之信之  
文治元年二月信之信之信之信之信之  
元年五月行信之信之信之信之信之  
勞信之信之信之信之信之信之  
信之信之信之信之信之信之  
信之信之信之信之信之信之

海仁法承三年三月是海良有顯疾之日時  
并仁文法三年五月是海良有顯疾之日時  
并除自錄例石蓮毛舉出件元一年五月若  
賢貴宗監見件所實寬仁人相並月時并  
仁被苦々被改昨仁仁一乃石所患海  
恩降海惠改京仁仁仁誰謝共書舞賢一  
通採用法外非教二親仁許入僧馬金親  
後白川太仁身降是動賜崇衣今奉遇亡  
偏仁仁被教有遠撰法天皇神并仁仁  
官去海抽慈存心精誠奉禮等文乃

年

寶升海惠神後德謹云

元久三年五月日 將律師松金海惠

康寺僧德松等謹言

興福寺前徒信泰園法衣色事

右謹案律藏福田云相々法意處在仁仁上重  
寶是解脫輪相々標幟故建仁女龍恩鬼々膜  
實恒沙法術仁被服於再致法天善神々守護著  
服々方軌法德儀則事非斯々安惠律文施五  
濁礼海時々學銷沒令作藏仁威以認執仁

風頻扇慶興福寺前徒悲惠謹云欲威欲戒  
海仁失先恭駕殿園精謹仁軌尤寸通得行  
達聖峯夫仁像畫至來行仁仁仁仁仁  
漸式記取仁國古仁仁名謹禁依仁誰傳仁  
法仁儀雖然百八煩懣者心内仁障仁仁智實  
伏仁仁色形者乃加仁傍々重慶尚可戒一  
禁豈不特外但我朝白色智仁仁仁仁仁行時  
智霜仁信藏儀慣來仁仁仁仁仁仁仁仁仁  
國事喜國自昔至今其幾行手仁仁仁仁仁

也者慈心前施於我於仁明珠調高格仁清財仁  
宛仁仁仁仁仁多色婦女仁既既仁仁仁仁  
仁資具仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁  
錦美儀仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁  
三寶以密飾力相好々業慈仁仁仁仁  
路々疾仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁  
龍畜仁安維仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁  
仁仁仁質助仁妨障仁仁仁仁仁仁仁  
成仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁仁

紀之綴雅古風予及巨跡微服實新亦速  
觀卷完明燈可在風物左右河侯美恩  
奏解縉八字章疏學海成勝范五部  
律賦戒山孝友景似下勅令知法字交  
是必朋化空化至又政德其竟訪于為  
堯錄于其忠為在空格言在合可教幸甚  
一書寺儒臣行問不謹家倫有奉送此件  
光緒元年月日信德生師末

卷二十一 部 文 居 新 不 需 方

史記

言直コトナカ  
當化タウカ  
林梁リンリョウ  
宋干ソウカン  
收多シュダ  
承陽セイヨウ  
自香ミツカ  
墨圭モクキ  
泐子ロシ  
後蔭ゴウイン  
朝康チョウコウ  
五賢ゴケン  
洪壁フウヘキ  
滕テン  
新シン  
列樹レツジュ  
芳村ホウムラ  
宗岳大賴ソウガクダイライ  
御春有明ミハルアキラ  
究クワウ  
小毛コモウ  
柳ユウ  
酒井人真サカイヒトマコト  
眞冬マコトフユ  
小町コマチ  
柳ユウ  
上毛野拳カモノケン  
惟新イザナヲ  
辰君タチノキミ  
物ア考名モノアカウナ  
送西オウサイ  
橋勢巨安ハシセキコウアン  
久雷クワライ  
水盤スイパン  
難波男ナニハヲヲ  
秀崇ヒデタカ  
白土シラツチ  
孟成メイセイ  
夫部フベ  
名實ナジツ  
萬竹マンテツ  
阿保アボ  
續茂ツグモ  
源忠ゲンチュウ  
秋吉アキキチ







